

若江遺跡第35次発掘調査報告

1988

財団法人 東大阪市文化財協会

若江遺跡第35次発掘調査報告

1988

財団法人 東大阪市文化財協会

は し が き

若江遺跡は、昭和47年に発掘調査が開始されて以来、既に37次に及ぶ調査が実施され、弥生時代から歴史時代（江戸時代）にいたる様々な遺構・遺物を検出し、若江地域の歴史を徐々にではありますが解明するに至っています。今回刊行することができました若江遺跡第35次発掘調査報告では、若江城の築城に伴って廃絶したと考えられる中世集落の井戸や溝、若江城が廃城となった時に埋められたと思われる大溝、井戸を載せることができ、中世集落と城の構築の関係を考える上での大きな手掛りを得ることができました。また、下層においては弥生時代後期の水田跡が発見され、水田の立地環境、水田区画の大きさなど弥生時代から開始された水稻農耕の水田造成技術、水田形態など栽培技術をもうかがうことができる大きな成果を得ることができました。

最後に、調査および報告書作成にあたって御協力・御指導をいただいた方々、関係諸機関に厚くお礼を申し上げますとともに、本書が歴史研究をはじめ、広く活用されることを心から願うものであります。

昭和63年3月

財団法人 東大阪市文化財協会
理事長 木 寺 宏

例 言

1. 本書は、東大阪市若江南町2丁目41・42番地で共同住宅建設工事に伴う発掘調査を実施した若江遺跡第35次の調査報告書である。
2. 発掘調査および遺物整理作業は、財団法人東大阪市文化財協会が浅田新蔵氏の委託を受け、現地調査を昭和62年5月19日から同6月22日まで、遺物整理を昭和62年5月23日から昭和63年3月31日まで実施した。
3. 調査・整理作業は、次の事務局体制により進めた。
理事長 木寺 宏 (東大阪市教育委員会教育長)
事務局長 寺澤 勝 (東大阪市教育委員会社会教育部参事)
調査部長 原田 修 (東大阪市教育委員会文化財課主査)
庶務部長 下村晴文 (東大阪市教育委員会文化財課主任)
庶務部 安藤紀子 (東大阪市教育委員会文化財課)
調査部 上野節子 (財団法人東大阪市文化財協会)
調査担当 勝田邦夫 (東大阪市教育委員会文化財課)
調査・整理補助員
井上伸一 栗須直樹 長岡 智 山内政勝
4. 本書の執筆および編集は勝田がおこなった。
5. 図版に収めた遺構写真は勝田が撮影し、遺物の撮影はG、Fプロに委託しておこなった。
6. 調査における土色名は、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修の『新版標準土色帖』によった。
7. 調査の実施にあたっては、浅田新蔵氏、生和建设株式会社の御協力を頂いた。厚くお礼を申し上げます。

本文目次

はしがき

例言

I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	4
1. 層位	4
2. 江戸時代の遺構	6
3. 鎌倉時代～室町時代の遺構	8
4. 弥生時代の遺構	13
IV. 出土遺物	22
井戸出土遺物	22
溝出土遺物	25
第3層出土遺物	30
第4層出土遺物	32
第8層出土遺物	34
瓦	36
V. まとめ	39

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺図	3
第2図	調査地点位置図	4
第3図	A地区西壁断面図	5
第4図	井戸1実測図	7
第5図	井戸2実測図	7
第6図	井戸3実測図	9
第7図	井戸4実測図	9
第8図	井戸5実測図	9
第9図	井戸6実測図	9
第10図	井戸7実測図	10
第11図	溝6断面図	11
第12図	溝8、9断面図	11
第13図	溝15断面図	11
第14図	溝16断面図	11
第15図	溝17断面図	13
第16図	第5層上面微地形	13
第17図	江戸時代の遺構	15~16
第18図	鎌倉時代~室町時代の遺構	17~18
第19図	弥生時代の遺構	19~20
第20図	第4層遺物出土状況	21
第21図	井戸出土遺物	23
第22図	溝出土遺物	26
第23図	溝15出土遺物	29
第24図	第3層出土遺物	31
第25図	第4層出土遺物	33
第26図	第8層出土遺物	35
第27図	瓦実測図	37

図版目次

図版 1		若江遺跡周辺航空写真
図版 2	遺構	1. 調査前の状況 2. 遺構検出状況
図版 3	遺構	1. 井戸 1 断面 2. 井戸 1 全景
図版 4	遺構	1. 井戸 2 全景 2. 井戸 2 内部
図版 5	遺構	1. A地区遺構全景 2. B地区遺構全景
図版 6	遺構	1. 井戸 3 全景 2. 井戸 3 立ち割り
図版 7	遺構	1. 井戸 4 全景 2. 井戸 4 立ち割り
図版 8	遺構	1. 井戸 5 タガ出土状況 2. 井戸 5 完掘状況
図版 9	遺構	1. 井戸 6 石臼等出土状況 2. 井戸 6 全景
図版10	遺構	1. 井戸 7 全景 2. 溝 6 断面
図版11	遺構	1. 溝 8 羽釜出土状況 2. 溝 8 断面
図版12	遺構	1. 溝15 2. 溝15、井戸 7
図版13	遺構	1. 溝16 2. 調査風景
図版14	遺構	1. 溝17 2. 溝17鋤跡

図版15	遺構	1. 第4層遺物出土状況 2. 第4層遺物出土状況
図版16	遺構	1. 第4層遺物出土状況 2. 第4層遺物出土状況
図版17	遺構	1. 第7層上面水田畦畔 2. 第7層上面水田畦畔
図版18	遺構	1. A1～2地区断面 2. A2～3地区断面
図版19	遺物	1. 井戸出土遺物 2. 溝出土遺物
図版20	遺物	1. 溝15出土遺物 2. 第3層出土遺物
図版21	遺物	1. 第4層出土遺物 2. 第8層出土遺物
図版22	遺物	土師器、瓦器、弥生土器
図版23	遺物	弥生土器
図版24	遺物	瓦、石臼

I. 調査に至る経過

若江遺跡は、東大阪市若江北町3丁目を中心に東西約500m、南北約800mと推定される弥生時代から歴史時代（江戸時代）に至る複合遺跡である。

昭和9年楠根川（現在の第二寝屋川）流路改修工事、用水路掘削工事、昭和38年府道大阪中央環状線敷設工事、昭和42年市立若江公民分館建設工事などに伴い、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などの土器や瓦が出土したことが地元の人々に知られていた。若江地域では、昭和47年を最初として、以降ほぼ毎年発掘調査が実施されており、今回の調査で第35次を数える。

今回の調査は、東大阪市若江南町2丁目41・42番地で共同住宅を建設する計画がある旨、東大阪市教育委員会に届出があったことを契機とする。この地点は第1次調査地点の南西約70m、第15次調査地点の南西25m、第5次、21次調査地点の北約30mにあたる。第1次調査では地表下1m内外で平安時代から室町時代に至る井戸5基をはじめとして、溝、土壇、土壇状遺構、ピットなどの遺構、弥生土器、須恵器、土師器、文字瓦、戯画瓦、軒瓦、瓦器、輸入磁器、国産陶磁器などの遺物が検出された。第15次調査⁽¹⁾では、弥生時代後期の遺物包含層が検出された。この包含層はO.P. 3.5mの第7層黒色粘土で、甕、壺、鉢、高杯、器台などの遺物が出土している。第21次調査では鎌倉時代から室町時代の遺物包含層と、溝、足跡といった遺構、弥生時代後期の包含層と遺構面が検出された。第5次調査⁽²⁾では弥生土器、土師器、瓦器、輸入磁器を含む包含層が検出された。これら周辺の状況から、平安時代から室町時代に至る時期の遺構面と弥生後期の包含層・遺構が今回の調査地点に及んでいることが予想された。

このため、東大阪市教育委員会文化財課では、昭和62年4月6日、建設予定地に2ヵ所の試掘トレンチを入れ、埋蔵文化財の状況を確認した。その結果、鎌倉時代から室町時代にかけての遺物包含層と弥生時代後期に相当すると思われる青黒色粘土層を検出した。鎌倉時代から室町時代にかけての包含層は、若江城の城域にみられる土層で、若江城や中世集落の遺構が存在する可能性が考えられた。青黒色粘土は、周辺の第15次、21次調査時の弥生後期の遺物包含層と土質、土色が類似しており、検出高も近いと思われ、遺物や遺構が検出される可能性が高いと判断された。したがって、工事によってこれらの層を破壊する場合には、事前の発掘調査が必要であるとの見解が出された。原因者と協議が行われた結果、基礎工事で掘削する部分、256㎡について発掘調査を実施することになり、発掘調査を財団法人東大阪市文化財協会に委託して行うこととした。

発掘調査は、昭和62年5月19日より、同6月22日まで、延23日間にわたって実施され、遺物整理は、昭和62年5月23日から、昭和63年3月31日まで行った。

注(1) 松田順一郎・勝田邦夫・阿部嗣治『若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報』『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集』1980年度 東大阪市遺跡保護調査会 1981年

(2) 藤井直正・下村晴文・勝田邦夫『若江寺跡・若江城跡』東大阪市教育委員会 1975年

II. 位置と環境

若江遺跡は、東大阪市若江本町、若江北町、若江南町一帯に所在する弥生時代から歴史時代（江戸時代）に至る複合遺跡である。

本遺跡の所在する若江周辺は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵、西を上町台地に囲まれた河内平野の中央部にあたり、標高4～5mを測る。河内平野は6000～7000年前、世界的な気候の温暖化に伴い海水面が上昇、生駒山麓まで海水が入り込んで湾を成していた。が、3000～2000年前には海退にうつり、それに伴う土砂の堆積が著しく、淀川、旧大和川の土砂の運搬、堆積作用により陸化が進んだ⁽¹⁾。河流によって運ばれた砂礫や泥が堆積してできる低平地（河成堆積低地）のなかも、蛇行原、三角州など、それぞれに形態の特徴、形成過程の異なる地形に細分され、さらにその中でも、河道沿いに細長くのびる平滑な微高地（自然堤防）、その背後の低平地（後背低地）、あるいは旧河道跡の微高地などが認められる。

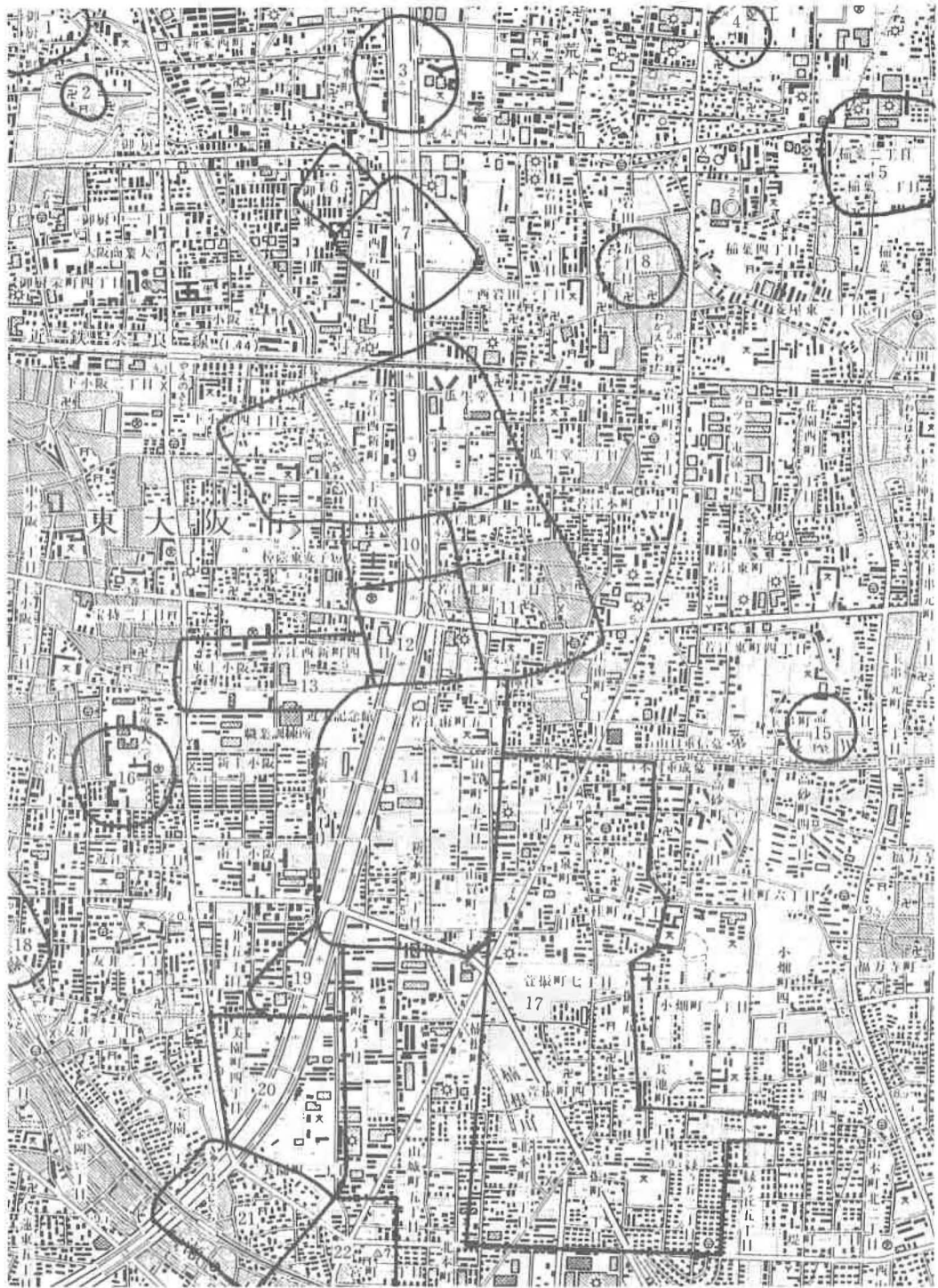
若江遺跡の周辺地域で生活が開始されたのは弥生時代に入ってからであり、弥生時代前期には山賀・瓜生堂・高井田遺跡で集落が営まれるようになった。瓜生堂や高井田は当時の河内湖のほとりに営まれた集落で、水稻栽培に適した低湿地の中でも、少しでも土地が高く、地盤のよいところに住居を構えたものと思われる。中期になると、淀川や旧大和川が運びこんだ土砂で、さらに農耕に適した土地が広がってゆくとともに、低湿地の開拓が行われたため、集落の数も増え、大きな集落へと発展する。平野やそのまわりの山々は、カシ類やシノキなどを主とする照葉樹林でおおわれていたが、生活のため森を切り開いて自然を破壊し、次第にアカマツの二次林となった⁽²⁾。そのため、雨が降る度に洪水となり、弥生後期になると、集落はかなり縮小する。古墳時代に入ってから、集落の小規模化は変わらなかったが、西岩田、小若江、意岐部などでも集落が営まれるようになった。

歴史時代に入ると、瓜生堂や若江で建物跡や溝などがみられ、土師器、須恵器などが出土している。平安時代の元慶年間（877～885）には若江寺が存在していたことが、『尊意贈僧正伝』によって知られ、奈良時代から室町時代に至る各時代の瓦や土器が出土している。

室町時代には、畠山氏が河内国守護に任ぜられ、河内国支配の拠点として若江城を築いた。しかし、畠山氏の家督相続争いにより、畠山氏は衰退し、かわって三好氏が、三好氏も織田信長により滅ぼされ、池田丹後守教正が城主となる。若江城は、信長の石山本願寺攻めの拠点として使われるが、天正8年に和議が成立し、役目を終え廃城となる。江戸時代には、若江村の集落とその周辺に水田、畑が広がるのどかな田園風景であったものと思われる。

注(1) 梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』青木書店 1986年

(2) 那須孝悌・樽野博幸ほか『河内平野の生いたち』大阪市立自然史博物館 1981年



- 1. 西堤遺跡 2. 薬師寺跡 3. 新家遺跡 4. 菱江寺跡 5. 稲葉遺跡 6. 意岐部遺跡
- 7. 西岩田遺跡 8. 岩田遺跡 9. 瓜生堂遺跡 10. 巨摩鹿寺遺跡 11. 若江遺跡 12. 若江北遺跡
- 13. 上小阪遺跡 14. 山賀遺跡 15. 玉串遺跡 16. 小若江遺跡 17. 萱振遺跡 18. 弥刀遺跡
- 19. 友井東遺跡 20. 美園遺跡 21. 佐堂遺跡 22. 宮町遺跡

第1図 遺跡周辺図

Ⅲ．調査の概要

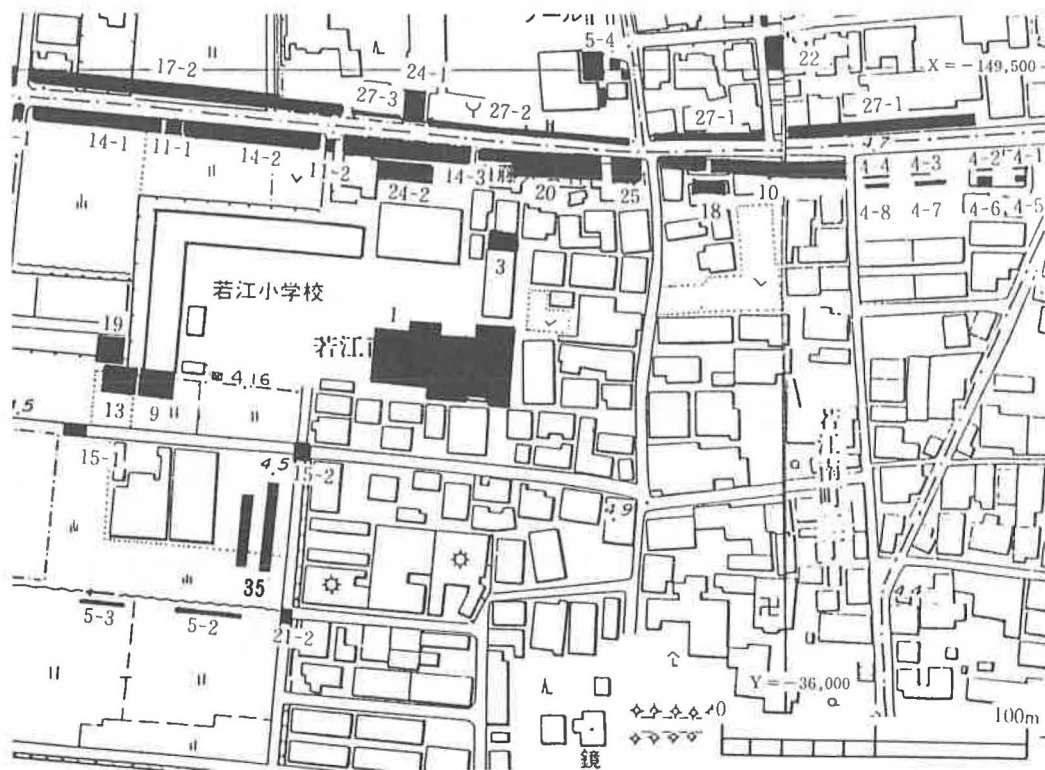
今回の調査地は、字城の南限にあたる場所であり、若江城の関連遺構が検出されると予想された。若江の旧集落は、旧大和川の本流の一つ、玉串川によって形成された自然堤防の砂堆の上であり、今回の調査地点はこの砂堆の西端にあたり、後背湿地の縁辺部に位置する。もとは水田や畑地として利用されていたところである。調査は地表下 1.3m の旧耕土まで機械掘削し、以下は人力により層を追って掘削・調査した。その結果、地表下 1.4m、第 3 層で 13 世紀から 17 世紀にかけての溝、井戸、第 4 層で弥生時代後期末～庄内期の土器溜り、第 7 層上面で弥生時代後期の水田畦畔、第 8 層で弥生時代後期中葉の包含層を検出し、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、輸入磁器、国産陶磁器、石製品、瓦などが出土した。

1. 層位

現在の地表面より弥生時代後期相当面までの約 2.4m の間に堆積した土層は、基本的に次の層に分けることができる。この層序は A 地区西壁を中心としての記述であるが、B 地区についても基本的には変わりはない。各層の土の粒度、質、色、時期などは次のとおりである。

第 1 層 盛土 山土などからなる現代層。耕土上に置かれたものである。層厚 85～130cm。

第 2 層 緑灰色、暗灰黄色粘土～極細砂 旧耕土。粒度により 3 層に分層できる。2 a 層は



第 2 図 調査地点位置図

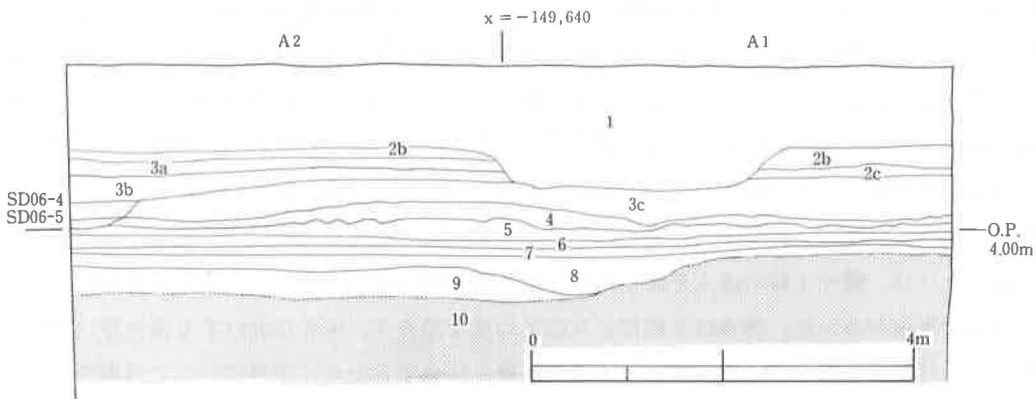
調査地南端付近にみられ、緑灰色 (10GY5/1) 粘土で、層厚14~27cm。水田土壌である。2 b層は2 a層に接し、南端付近を除いて全域に認められる。暗灰黄色(2.5 Y5/2) 極細砂で畑地として利用されていたようである。層厚8~22cm。2 c層は北端付近で検出されたもので2 b層の下層にあたる。暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細礫混りシルト。層厚7~15cm。

第3層 暗緑灰色、暗灰黄色、オリーブ灰色のシルト~粗砂 弥生時代から歴史時代(江戸時代)の遺物包含層。粒度、土質などから5層に分層できる。3 a層は調査地北端付近を除いて全域に認められる。暗緑灰色 (10GY3/1) シルト。層厚7~24cm。南側ほど厚さを増す。3 b層は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、輸入磁器、国産陶磁器など多量の土器、瓦を包含している。暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細礫混りシルト。層厚10~59cm。中世~近世の遺構面を覆っていて、南側ほど厚さを増す。3 c層は調査地北側でのみ認められた。オリーブ灰色シルト (5GY5/1)。層厚22~45cmで北に行くほど厚くなる。3 d、3 e層は調査地中央部で認められた。いずれも粘土であり、3 d層がオリーブ黒色 (7.5Y2/2)、層厚11~19cm、3 e層が灰色 (7.5Y4/1)、層厚4 cmである。

第4層 黒褐色中粒砂~粗砂 弥生時代後期から庄内期にかけての遺物包含層。層厚5~35 cmでかなりの起伏がある。南に行くにしたがって厚さを増すが、南端付近では遺構の掘削により削り取られたのか認められない。

第5層 褐色中粒砂~粗砂 層厚6~22cm。北半部分はかなりの起伏がみられるが、南半ではほぼ水平堆積で安定している。南側ほど厚さを増す。

第6層 暗緑灰色シルト~極細砂 層厚10cm、ほぼ水平に堆積する。



- | | | |
|--------------------------|--------------------------|------------------------|
| 1. 盛土 | 3c. オリーブ灰色(5GY5/1)シルト | 7. 灰色(7.5Y4/1)粘土 |
| 2a. 緑灰色(10GY5/1)粘土 | 3d. オリーブ黒色(7.5Y2/2)粘土 | 8. 灰色(7.5Y4/1)中粒砂混りシルト |
| 2b. 暗灰黄色(2.5Y5/2)極細砂 | 3e. 灰色(7.5Y4/1)粘土 | 9. 暗緑灰色(7.5GY3/1)シルト |
| 2c. 暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫混りシルト | 4. 黒褐色(10YR3/1)中粒砂~粗砂 | 10. オリーブ灰色(2.5GY6/1)粗砂 |
| 3a. 暗緑灰色(10GY3/1)シルト | 5. 褐色(7.5YR4/4)中粒砂~粗砂 | |
| 3b. 暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫混りシルト | 6. 暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト~極細砂 | |

第3図 A地区西壁断面図

第7層 灰色粘土 層厚3～13cm。弥生時代後期の水田土壌と考えられる。この上面で畦畔が検出された。

第8層 灰色中粒砂混りシルト 層厚10～37cm。ゆるやかな起伏が認められる。弥生時代後期の遺物包含層。

第9層 暗緑灰色シルト 層厚10～42cm。

第10層 オリーブ灰色粗砂 北側が高く、ゆるやかに起伏しながら南側へ下降する。

2. 江戸時代の遺構

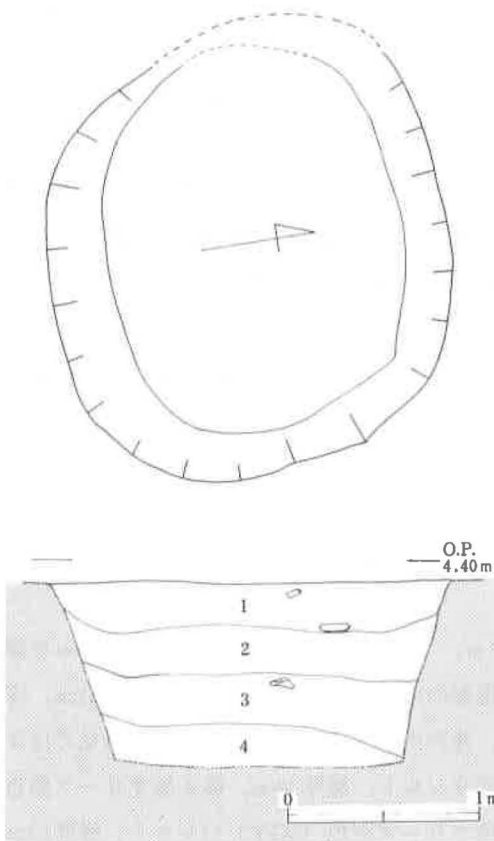
調査地南半で井戸2基、溝4条を検出した。

井戸1

B5地区で検出した。検出面での規模は、長径2.5m、短径2.1mの楕円形である。掘削は検出面から1.8mまで行ったが、湧水が激しく、付近への影響も考えて以下の掘削は中止した。井戸側は検出されなかったが、竹のタガや扁行唐草文軒平瓦をはじめとして、丸瓦・平瓦などが100片近くも出土しているため、桶や瓦などを使用した井戸側が設置されていたものと思われる。内部は、断面観察の所見で4層に分層できたが、すべて井戸廃絶後の埋土である。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器（備前焼、唐津焼、美濃焼、伊万里焼）、瓦などがあるが、伊万里焼などからみて18世紀頃に廃絶したものと思われる。

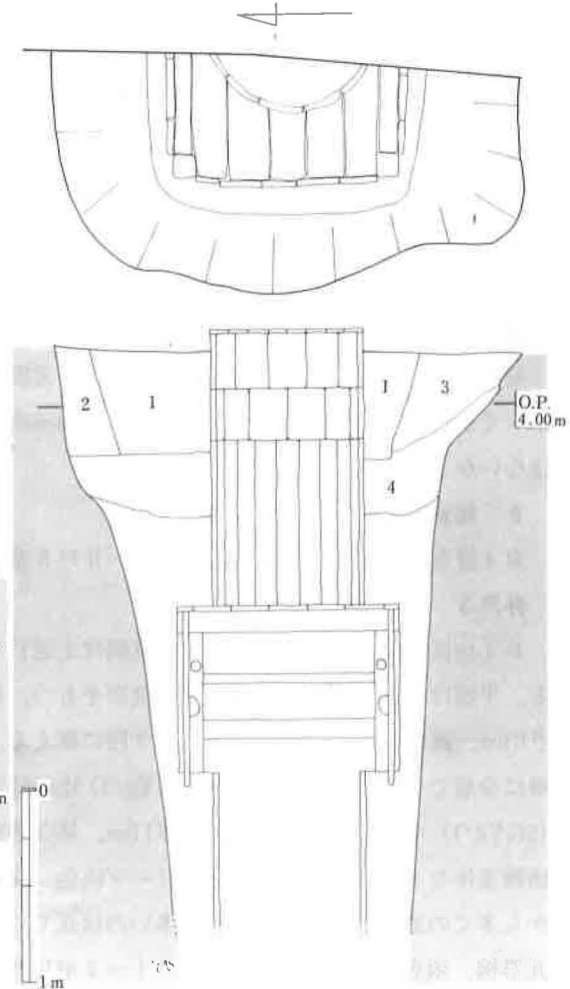
井戸2

B5～6地区で検出した。検出面での規模は一辺2.4mの不整形な方形を呈する掘形をもつ。井戸側は4段階に分けられる。最下段は直径0.8m、深さ0.8m以上の桶側を据える。その上の第3段目は四隅に一辺12cm前後の角柱を1.1m間隔に置き、それに柄穴を穿って横棧を3段渡し、その横棧の外側に沿って幅12～23cm、厚さ3～4cm、長さ92cmの板を縦に並べている。縦板の上端内側には厚さ2～3cmの板材を横たえている。この板材は中央部に直径75cmの円形の穴があくように加工されており、四隅の角柱間をつなぐ横棧の上に渡された南北方向の2本の角柱にのせられている。2段目は、3段目の上に横たえられた板材の上に直径80cm、深さ86cmの桶側を置いている。桶は、幅8～12cm、厚さ2cm、長さ86cmの板を22枚並べ、外面の上、中、下の3ヶ所を竹製のタガで締めたものである。上段は、2段目の桶と同じ直径になるように、縦27cm、横20cm、厚さ2～3cmの平瓦を13枚並べたものを2段積み上げて井戸側としている。この瓦の上には、塵や土砂の流入を防ぐために木の蓋が置かれていた。この井戸は4段目の下半に土砂の堆積がみられ、湧水は2段目と3段目の境まであり、現在においても湧水量は豊富である。井戸掘形の埋土は、断面観察の所見で4層に区分できたが、下層については掘削していないため不明である。埋土からは、土師器皿・羽釜、瓦器播鉢・甕・火舎・羽釜・椀、須恵器壺、備前焼播鉢、青磁椀、伊万里焼椀、弥生土器甕などが出土した。出土した遺物では16世紀に属するものが一番多いが、少数ながら伊万里焼椀がみられることから、17世紀後半から18世紀にかけて構築されたものと思われる。井戸が機能していた当時の周辺の土質をみると、暗緑灰色シルト～暗灰黄色細礫混りシルトで、特に調査地南端付近は黄灰色中粒砂～粗砂と砂質の



- 井戸1 1. 灰色(10Y4/1)細礫混りシルト 3. 暗灰色(N3)シルト
 2. 暗緑灰色(10GY3/1) " 4. 暗灰色(N3)粘土
 井戸2 1. 黄褐色(10YR5/6)中粒砂混りシルト
 2. 灰色(10Y4/1)中粒砂混りシルト
 3. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)中粒砂混りシルト
 4. 暗緑灰色(10GY3/1)中粒砂

第4図 井戸1実測図



第5図 井戸2実測図

土壤が優越している。

寛永15年(1638)の年紀をもつ『毛吹草』の巻四に諸国の名物、名産が記されている。河内国の名産の中に「久宝寺木綿」がみられる。「久宝寺木綿」は河内国汲川郡久宝寺で生産する木綿であるが、河内国中部農村の木綿生産の代表としてあらわれたものであり、その周辺における農村で生産されていたものが含まれている。木綿織物は最も重要な庶民の衣料品であったので、農村では最も金になる産業であった。木綿織物の原料は綿であり、農村では米作りのほかに商品作物として、綿の栽培がしだいに盛んになっていったことを暗示している。寛永年間、市中の京橋に綿市場が開設されたり、それより以前に平野郷に綿市場があったということから、江戸時代初期には、綿作はかなり展開していたようである。寛永19年、幕府が「田方に木綿作申間敷事」と令したことから、逆に当時すでに綿作が発展していたことがうかがえる⁽¹⁾。延宝5年(1677)、若江郡小若江村検地帳で見れば、田と畑の比率は45.9%対54.1%で畑が優越して

いる。このうち田方でも綿を作付している例があり、綿作率は54.2%となっている⁽²⁾。若江村については知るすべもないが、ほとんど同じような立地条件にあることから、小若江村と同様に綿作を行っていたと考えられる。綿が大和川付替えによって新しくできた川床跡で栽培されていたことから、宝永年間以降木綿生産が増加したといわれる。

さて、この井戸であるが、規模が大きく貯水量が豊かであること、調査地点が当時の集落より西へ少し離れていること、旧大和川によって形成された自然堤防上で砂質土であることから、生活用水よりも、綿作などの灌漑用として使用されたのではないかと思われる。

溝

黄灰色中粒砂～粗砂上面から掘り込まれた素掘りの溝である。幅20～55cm、深さ4～12cm、すべて東西方向に延びる。溝と溝の間隔が70cm前後であり、綿作などに伴う畑の畝になるのではないかと思われる。

3. 鎌倉時代～室町時代の遺構

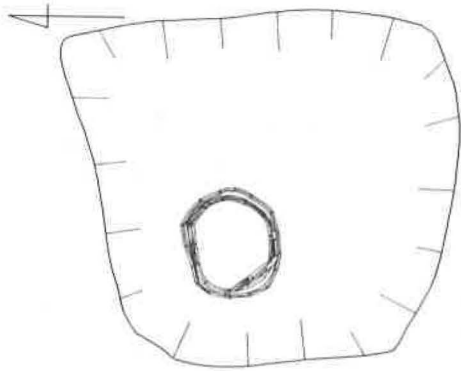
第4層及び第3c層上面で検出した。井戸5基、溝13条がある。

井戸3

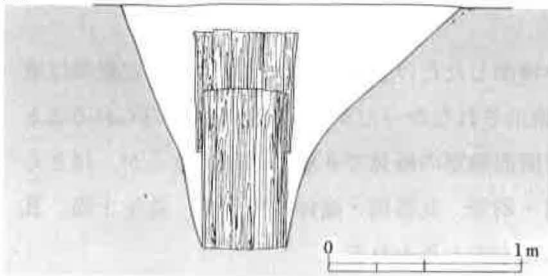
B2地区で検出した。検出面での規模は上辺1.1m、下辺1.9m、高さ1.8m、深さ1.13mを測る。平面は台形状で、截頭円錐形の掘形をもつ。掘形の中心よりやや北西寄りに直径51cm、深さ64cm、直径44cm、深さ84cmの桶を2段に据える。井戸内の堆積土は、断面観察の所見では4層に分層できる。第1層黒色(2.5GY2/1)中粒砂混りシルト、層厚28cm。第2層オリーブ黒色(5GY2/1)中粒砂混りシルト、層厚11cm。第3層暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト、層厚13cm、植物遺体を多く含む。第4層暗オリーブ灰色(5GY4/1)細礫混り極細砂、層厚38cm。1～2層から多くの遺物が出土した。特に多いのは瓦で、次いで弥生土器である。他に土師器皿・羽釜、瓦器椀、須恵器、鉾滓がある。この1～2層は井戸廃絶時の埋土、3～4層が堆積土である。土師器皿から15世紀前半から中葉に廃絶したものと思われる。

井戸4

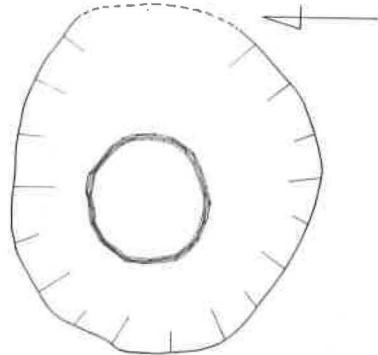
B3地区で検出した。検出面での規模は長径1.8m、短径1.6m、深さ1.75mを測る。平面形は楕円形で、截頭円錐形の掘形をもつ。掘形の中心に桶を3段据えて井戸側とする。桶の規模は上段から直径64cm・深さ37cm、直径59cm・深さ122cm、直径52cm・深さ57cmである。内部は断面観察の所見で4層に分層できる。第1層暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)細礫混り細砂、層厚24cm。第2層暗緑灰色(10GY3/1)粗砂、層厚26cm、植物遺体を多く含む。第3層暗緑灰色(10GY3/1)細砂、層厚20cm。第4層暗オリーブ灰色(5GY3/1)中粒砂、層厚30cm以上。第4層以下は井戸の径が小さく掘削が困難なこと、湧水が激しいことなどから断念した。第1～3層は井戸を廃絶した時の埋土で、さらにこの上をオリーブ黒色(10Y3/1)細礫混りシルトで埋めていた。これらの埋土からは、巴文軒丸瓦、均正唐草文軒平瓦をはじめとして、丸瓦、平瓦が418片も出土した。瓦以外では土師器皿・羽釜、瓦器椀・火舎・播鉢・甕、須恵器、弥生土器が出土した。土師器皿から15世紀前半に廃絶したものと思われる。



O.P.
4.5m

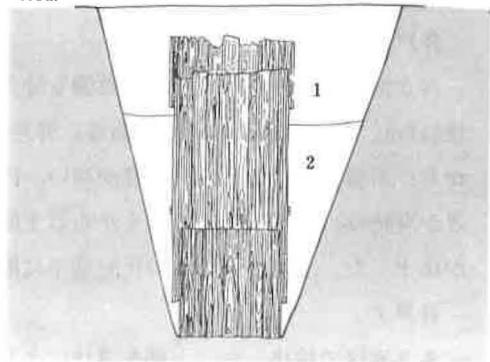


第6図 井戸3実測図



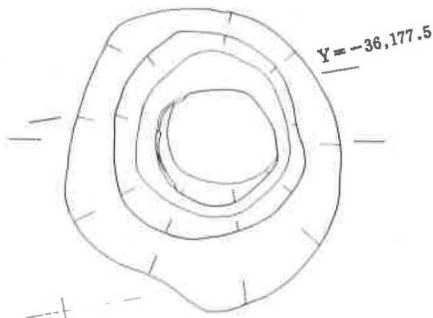
0 1m

O.P.
4.5m

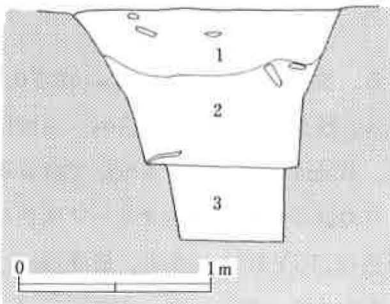


1. 暗緑灰色(10G4/1)細礫混りシルト
2. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細礫混りシルト

第7図 井戸4実測図



O.P. 4.4m

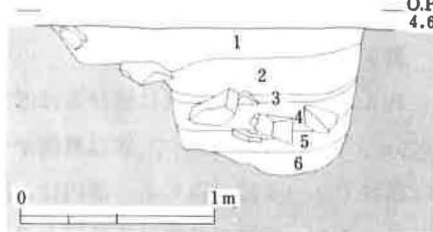


1. 灰色(10Y4/1)細礫混りシルト
2. 灰色(N4)細砂
3. 灰白色(7.5Y8/2)中粒砂

第8図 井戸5実測図



O.P.
4.6m



1. 暗緑灰色(7.5GY4/1)細礫混りシルト
2. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細礫混りシルト
3. 黒色(5Y2/1)粘質シルト
4. 灰色(5Y6/1)細砂-中粒砂
5. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細砂混りシルト
6. 暗緑灰色(7.5GY3/1)シルト

第9図 井戸6実測図

井戸 5

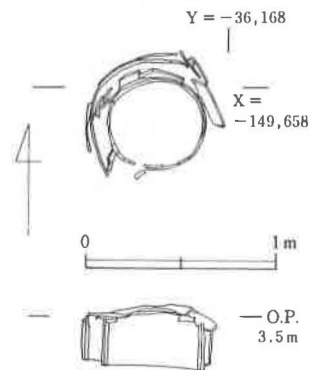
B 6 地区で検出した。検出面での規模は長径1.6m、短径1.4m、深さ1.2mを測る。平面形は楕円形で2段掘りされている。井戸側は検出されなかったが、掘形の中央、検出面より0.75m下で円形に廻る竹のタガが出土したので、桶の井戸側があったことが判明した。最下段の井戸側は掘形より推定すれば、直径53cm、その上の段は直径76cmであったものと思われる。内部は断面観察の所見で3層に分層できる。1～2層は廃絶時の埋土、3層は堆積土と思われる。1～2層は均正唐草文軒平瓦をはじめとして、丸瓦・平瓦が221片出土した。また、自然石も多く出土したことから、下が桶、上が瓦と石を円形に積み上げた瓦積井戸であった可能性が高い。瓦以外には瓦器火舎・播鉢・甕、土師器羽釜、須恵器、陶器（備前焼播鉢・瀬戸焼瓶子・常滑焼片）弥生土器が出土した。備前焼播鉢から16世紀後半に廃絶したものと思われる。

井戸 6

A 3 地区で検出した。井戸の西側5分の2を検出しただけである。検出面での推定規模は直径1.7m、深さ0.76mの円形である。井戸側は検出されなかったが、自然石が多くみられることから、石積井戸であった可能性が高い。内部は断面観察の所見で6層に分層できるが、ほとんどが廃絶時の埋土である。埋土からは土師器皿・羽釜、瓦器椀・播鉢、須恵器、弥生土器、瓦が出土した。土師器皿から15世紀前半に廃絶したものと思われる。

井戸 7

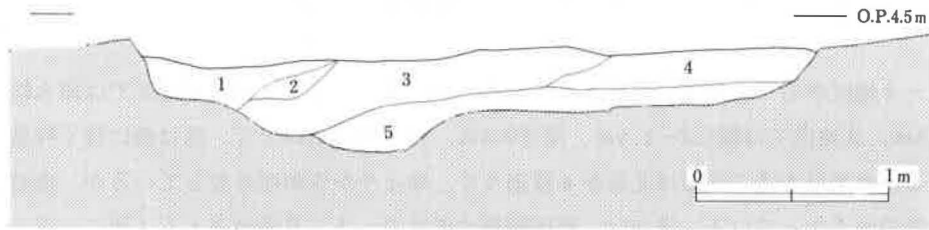
A 5 地区で検出した。上部を溝15により切られているため、掘形の規模などは不明である。井戸側として曲物がある。曲物は直径25cmと35cmの2つがあり、深さはいずれも12cmである。外側の曲物は南東側半分が破壊されているが、最下段のものはほぼ完形である。外側の曲物はもう少し上に設置されていたものと思われるが、溝掘削時に破壊され、下にずれ込んだものと思われる。曲物の上に他の曲物の残片がみられることから、井戸側は曲物を何段か積み上げた曲物井戸の可能性が高い。曲物内からは土師器皿、羽釜の細片が少量出土した。時期は不明。



第10図 井戸 7 実測図

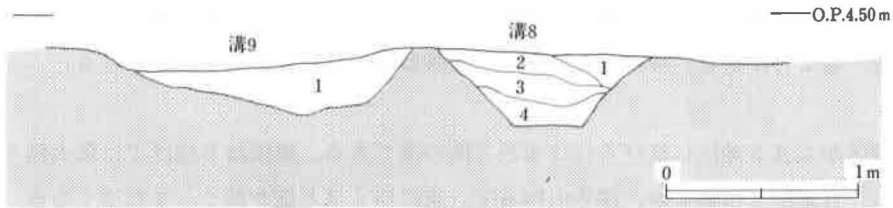
溝 6

B 3 地区から A 3 地区に延びるほぼ東西方向の溝である。規模は、幅1.0～1.4m、深さ0.2～0.5m、長さ12.5m以上で、底は東側がやや低くなっている。断面はB地区では台形、A地区では皿状で2～3段に落ちる。溝内は、断面観察の所見で、B地区では3層、A地区では5層に分層できた。堆積の状態はA地区とB地区では異なり、B地区では第1層暗オリーブ灰色(5GY3/1)細礫混りシルト、層厚17cm、第2層暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト、層厚19cm、第3層暗緑灰色(5G4/1)細砂、層厚15cmで、瓦、土師器、弥生土器が出土した。A地区では、B地区よりも多くの遺物があり、第1層からは多量の瓦、弥生土器甕、土師器皿、瓦器椀、第2層からは瓦、土師器皿、瓦器椀・羽釜、須恵器捏鉢、弥生土器甕、第3～5層からは少量の瓦



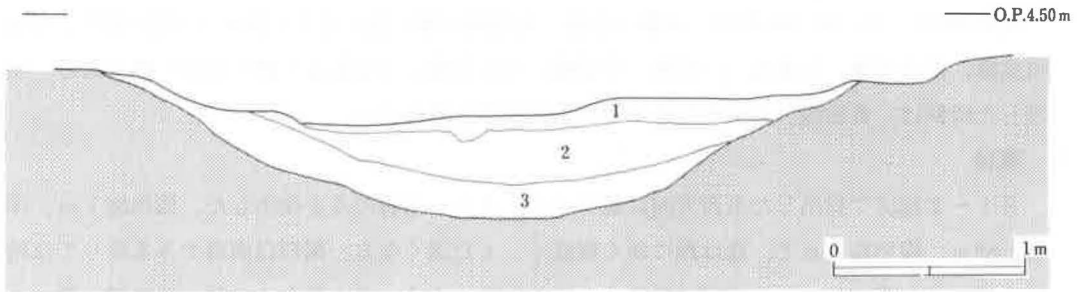
- | | |
|-----------------------------|----------------------------|
| 1. 暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂混りシルト | 4. オリーブ灰色(2.5GY5/1)細礫混りシルト |
| 2. 灰オリーブ色(5Y4/2)極細砂 | 5. 暗緑灰色(5G4/1)細砂 |
| 3. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細礫混りシルト | |

第11図 溝6断面図



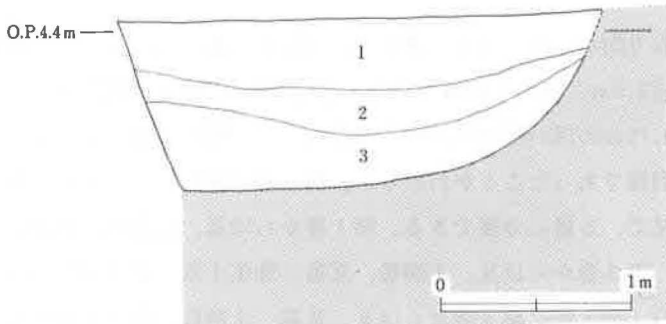
- | | |
|--------------------------------|-------------------|
| 溝9 1. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細礫混りシルト | |
| 溝8 1. 灰色(7.5Y4/1)細礫混りシルト | 3. 灰色(7.5Y4/1)シルト |
| 2. 灰色(5Y4/1)細砂混りシルト | 4. 灰色(10Y4/1)粘土 |

第12図 溝8・9断面図



第13図 溝15断面図

- | |
|----------------------|
| 1. 灰色(7.5Y4/1)シルト |
| 2. 灰色(7.5Y4/1)粘土 |
| 3. 灰色(10Y4/1)中粒砂混り粘土 |



- | |
|------------------------|
| 1. 暗緑灰色(10G4/1)細礫混りシルト |
| 2. 暗青灰色(5BG3/1)シルト |
| 3. 暗緑灰色(10G3/1)粘土 |

第14図 溝16断面図

が出土した。埋没した時期は、土師器皿から15世紀前半と思われる。

溝8

B3～4地区からA4地区に延びるほぼ東西方向の溝である。規模はB地区では最大幅4m、深さ0.8m、A地区では幅1.2～1.5m、深さ0.4m、長さ12.5m以上で、底は西に行く程低くなっている。B地区の溝の掘形は北肩が4段掘りで、ゆるやかな斜面をなしているが、南肩は1段で、急斜面となっている。溝内は、断面観察の所見で、A、B両地区とも4層に分層できるが、堆積土は異なる。B地区は、第1層オリーブ黒色(7.5Y3/1)細礫混りシルト、層厚10～22cm、第2層灰色(7.5Y4/1)細砂混りシルト、層厚13～34cm、第3層暗緑灰色(7.5GY3/1)細砂混り粘土、第4層黒色(2.5GY2/1)シルト、層厚30～40cmで、第4層には植物遺体を多く含む。A地区の第1～2層、B地区の第1、3層からの出土が多く、瓦、瓦器椀・羽釜、須恵器、弥生土器甕・壺などがある。埋没した時期は、土師器皿から15世紀前半と思われる。

溝15

B5地区からA5地区に延びるほぼ東西方向の溝である。規模はB地区では最大幅5m、深さ0.64m、A地区では幅4m、深さ0.74mで、東にゆくほど底が低く、また深くなる。掘形はA、B両地区とも傾斜がゆるやかで皿状を呈する。溝内は、断面観察の所見で、A地区3層、B地区2層に分層できる。B地区では第1層暗青灰色(5BG3/1)細礫混りシルト、層厚17cm、第2層暗緑灰色(7.5GY3/1)中粒砂混り粘土、層厚35cmである。この溝15からは、A、B両区とも多量の遺物が出土した。巴文軒丸瓦1種、均正唐草文軒平瓦3種をはじめとして丸瓦、平瓦が903片、その他土師器皿・羽釜・小盃、瓦器椀・皿・甕・火舎・香炉・羽釜・播鉢、備前焼播鉢、常滑焼甕、青磁椀、白磁椀、染付椀、天目茶椀、須恵器壺・甕・高杯・鉢がある。埋没した時期は、青磁椀、備前焼播鉢から16世紀後半と思われる。

溝16

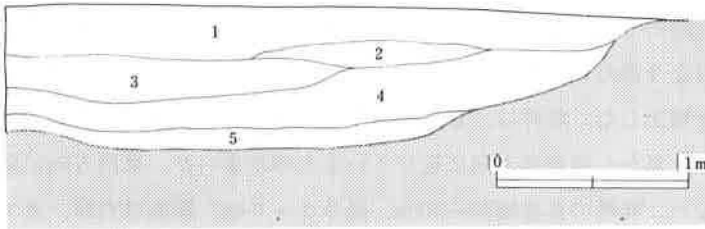
B1～2地区で検出した東西方向に延びる溝である。南肩のみを検出した。検出幅1m、深さ0.88m、検出長3mで、底は西にゆく程低く、また深くなる。掘形は南肩でみる限りでは椀形を呈する。溝内は、断面観察の所見で3層に分層できる。第1層からは瓦、瓦器椀・皿、土師器皿、須恵器、弥生土器、第2層からは瓦(文字瓦を含む)、瓦器椀・皿、土師器皿・羽釜、弥生土器が出土した。埋没した時期は、土師器皿、瓦器椀から13世紀前半と思われる。

溝17

A6地区で検出した。溝の走る方向から考えると、溝15から分岐して南に向うもので、北東コーナー部分を検出した。検出幅3.5m、深さ0.65mである。北肩はゆるやかに2段に落ちるが、北東コーナーよりやや西で、幅0.75mの浅い掘り込みがみられる。この掘削は鋤によるものと思われ、痕跡から鋤の幅が16cm前後であったことがわかるが、何の為に掘削されたのかはわからない。溝内は、断面観察の所見で、5層に分層できる。第1層からは瓦、瓦器椀、土師器皿、陶器片、須恵器片、弥生土器が、第3層からは瓦、土師器、瓦器、弥生土器、第4層からは瓦、瓦器、土師器、須恵器、弥生土器、焼土が、第5層からは瓦、瓦器、土師器、弥生土器が出土

O.P.
4.50m

1. 黒褐色(2.5Y3/1)細礫混りシルト
2. 黄灰色(2.5Y4/1)細礫混りシルト
3. 黒色(7.5Y2/1)シルト
4. 灰色(7.5Y4/1)中粒砂混りシルト
5. 緑黒色(5G1.7/1)シルト



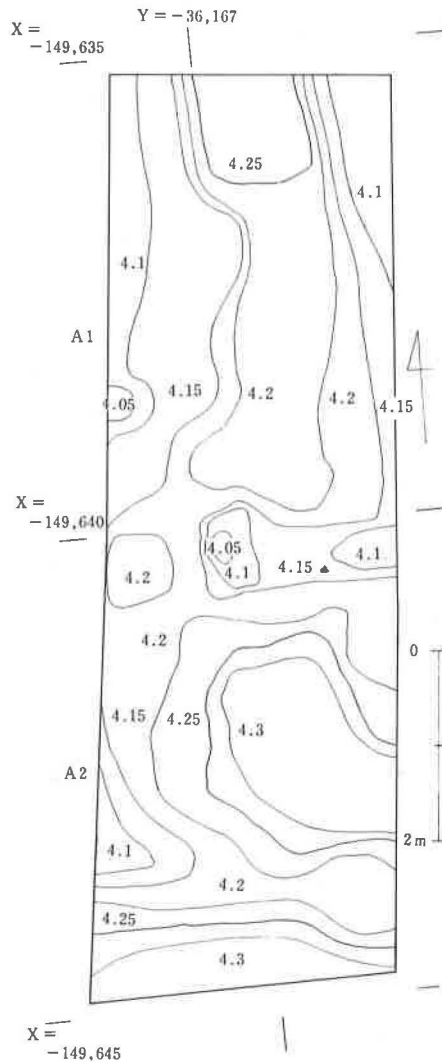
第15図 溝17断面図

したが、各層とも細片であった。埋没した時期は、土師器から16世紀後半と思われる。

4. 弥生時代の遺構

弥生時代では、第4層で弥生時代後期の新段階から庄内式期にかけての遺物包含層、第7層上面で水田の畦畔、第8層で弥生時代後期の中段階の遺物包含層を検出した。

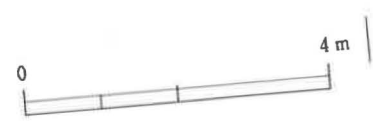
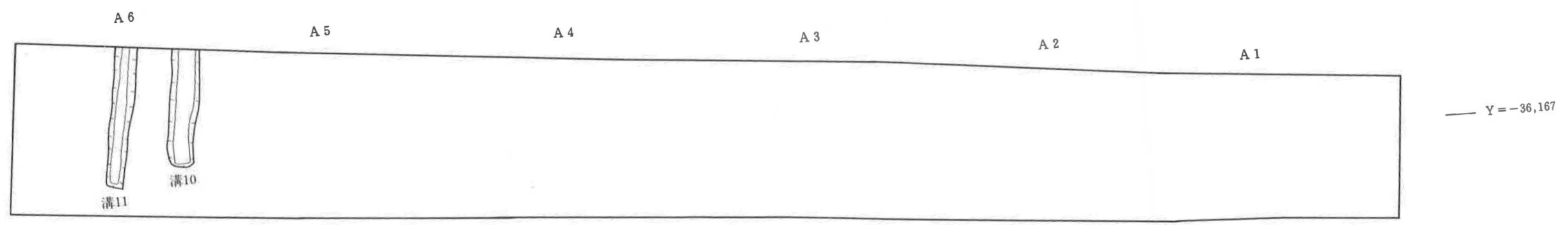
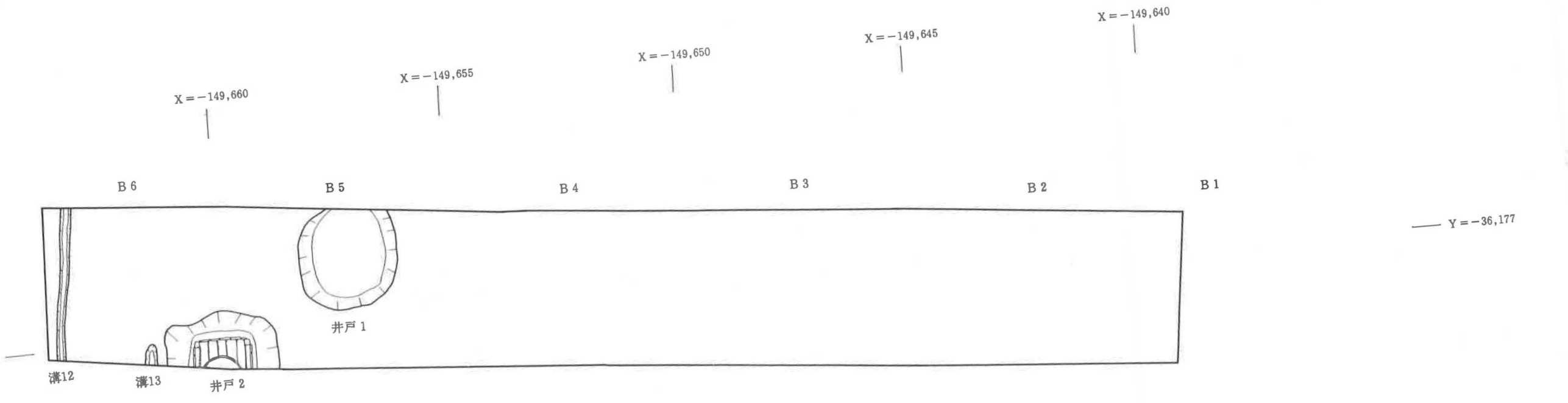
第4層では、A1～A3、B1～B3地区といった調査区北半で遺物が割合まとまった状態で出土した。遺物の出土状態をみると、A1地区の北半、A2地区の南半を中心とした2つの大きなまとまりに分けることができる。この遺物のまとまりは、第5層上面の地形の起伏によって生じたものと考えられる。第5層上面の起伏をみると、A2地区南端と中央部東寄り、A1地区北端中央部に高まりがみられ、高まりの四周に谷状の窪地がみられる。遺物は、A1地区では北端の台地状の高まり上と、高まりから南に伸びる舌状をした高まり、高まりから谷状の窪地に至る傾斜地にみられる。A2地区では、中央部東寄りにある台地状の高まりの西側、谷状の窪地に至る傾斜地にみられる。B地区はA地区に較べると遺物の量は少なく、まとまりはみられなかった。B3地区中央西端がO.P.4.25mと高く、そこから南東、北東側に尾根状に張り出す地形がみられ、これにはさまれた谷状の



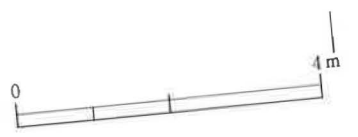
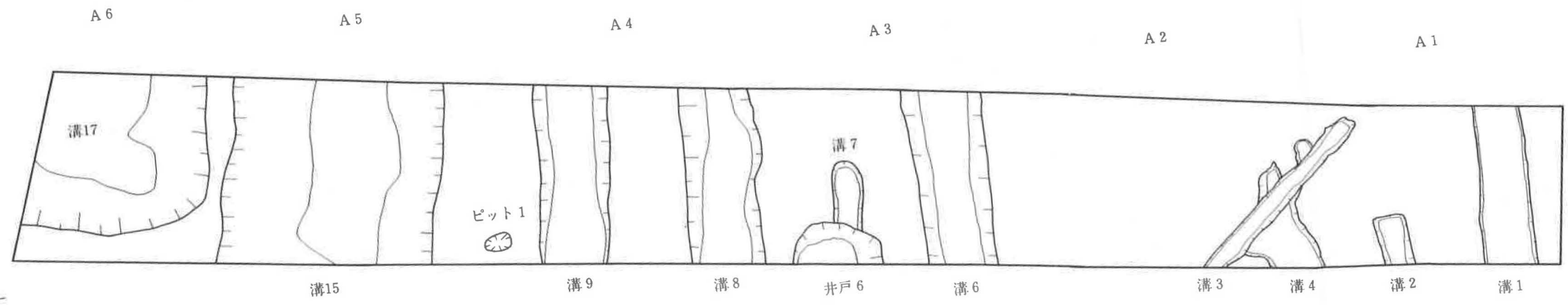
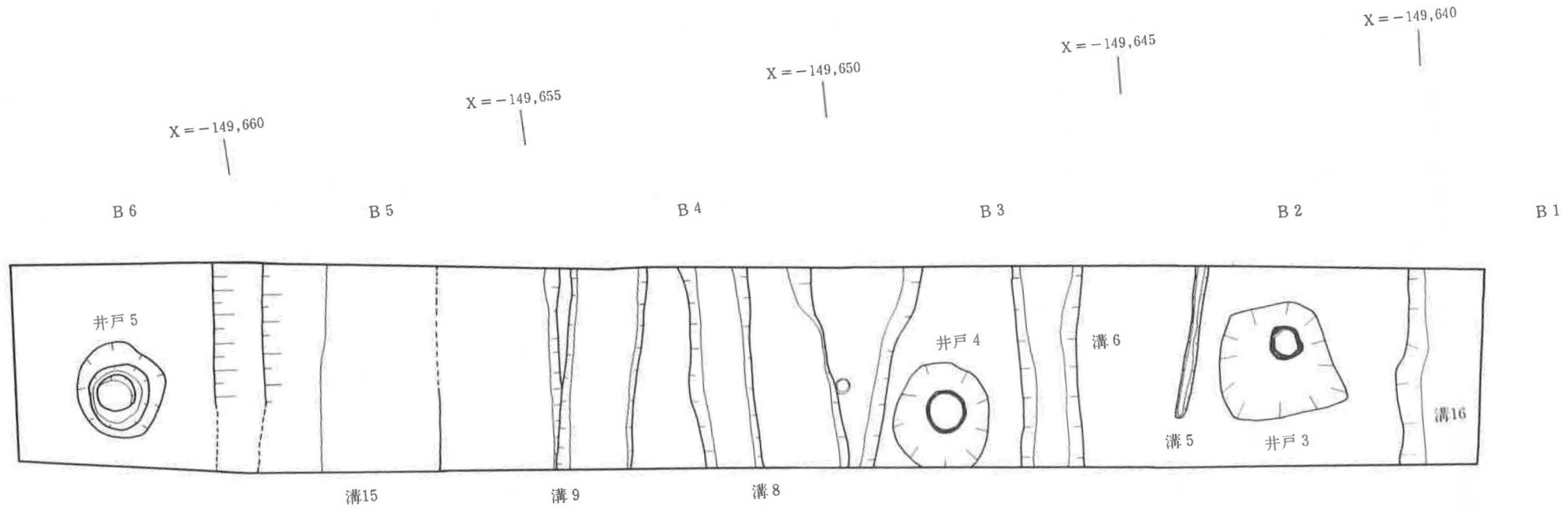
第16図 第5層上面微地形

窪地に至る傾斜地、O.P.4.2~4.15mの地点で遺物が出土した。これらの出土状態から、台地上の微高地で生活が行われており、谷状の窪地に遺物を廃棄したものと考えられる。ただ今回の調査では、住居址などは検出されておらず、また調査面積も小さく、微地形もほんの一部を検出しただけであるので、当時の生活の様子をうかがうことができなかつたが、居住地周辺の状況をうかがえる一資料にはなり得たと思われる。

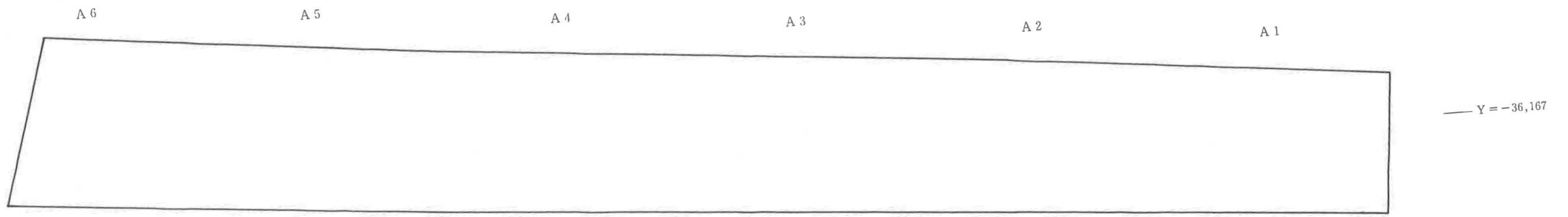
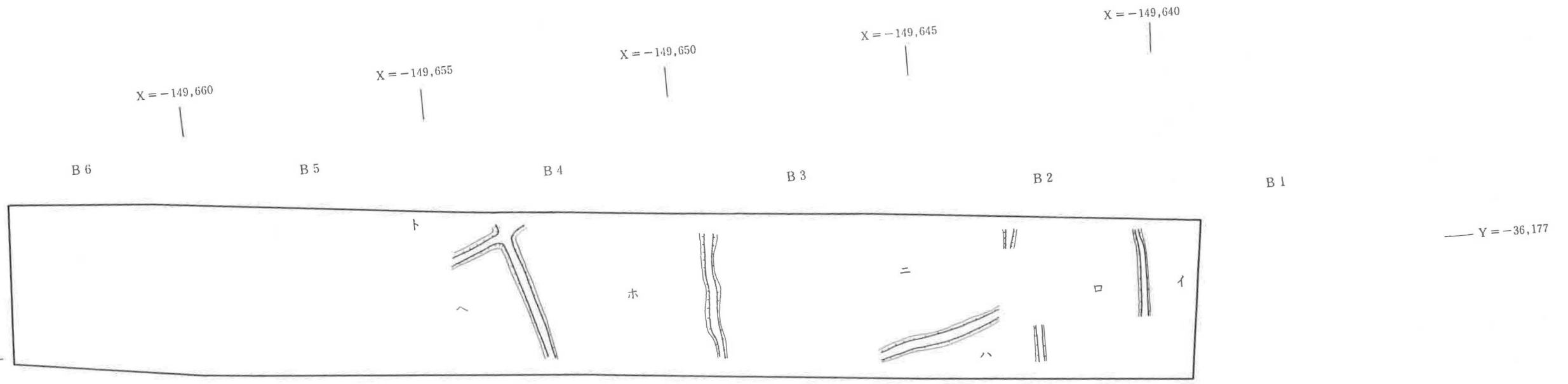
第7層上面で水田の畦畔を検出した。畦畔は、B地区のみでA地区では検出されなかつた。畦畔は南南東から北北西、東北東から西南西方向に延びているものが多いが、東西方向に延びるものもあり、画一的ではない。畦畔の基底幅20~30cm、高さ3~5cm、断面は台形、カマボコ状を呈する。推定すれば、水田一区画の面積が20~30㎡になると思われる。畦畔及び耕土は灰色粘土(7.5Y4/1)を基調とするが、暗緑灰色(7.5GY3/1)シルトが混じる。各区画(イ~ト)をみると、イの水田面の高さは平均O.P.3.89mで、さらに詳しくみると、北側が3.9mで一番高く、南端中央部が3.86mで一番低くなっている。同様にロは平均3.87mで、最高が北端中央部の3.894m、最低が南端東部の3.824m、ハは平均3.81mで、最高が北端の3.832m、最低が南端の3.786m、ニは平均3.8mで、最高が北端の3.83m、最低が南東端の3.755m、ホは平均3.77mで、最高が北西端の3.796m、最低が南端中央部の3.754m、ヘは平均3.79mで、最高が南端の3.8m、最低が北端中央部の3.776m、トは平均3.79mで、最高が南端の3.799m、最低が北端の3.789mであった。区画された水田内の比高差は、イが4cm、ロが7cm、ハが5cm、ニが7cm、ホが4cm、ヘが2cm、トが1cmであったが、イ、ハ、ヘ、トは区画された水田のほんの一部の検出であるので、比高差は7cmぐらいあったものと思われる。区画された水田間の高さをみると、イ→ロ→ハ→ニ→ホ←ヘ=トとなり、イが一番高くホが一番低くなる。イ-ロ間で2cm、ロ-ハ間で5cm、ハ-ニ間で1cm、ニ-ホ間で4cm、ヘ及びト-ホ間で3cmの比高差がある。B地区の南側は、室町時代に掘られた大溝により水田の畦畔が破壊され、検出することができなかつたが、調査した範囲内で当時の微地形を復原すれば、調査地東側のA地区が旧大和川によって形成された自然堤防の西端にあたり、A、B両地区間で後背湿地へと移行し、西側へと傾斜して低くなってゆく。ただ畦畔の高さや比高をみると、北と南で高く、水田区画のホで一番低くなっているの、舌状に北西、南西方向に微高地があったことがわかる。このような地形の緩傾斜地を水田として開発したため、水田区画間に比高差ができ、また区画も小区画となったものと思われる。今回検出した畦畔は、旧地形の傾斜の等高線に沿う形で配置されたものであろう。この種の水田に該当するものとしては、佐賀県菜畑遺跡(縄文時代晩期~弥生時代中期)、滋賀県服部遺跡(弥生時代前~中期)、岡山県百間川遺跡(弥生時代中~後期)、兵庫県志知川沖田南遺跡(古墳時代前期)、三重県北堀池遺跡(古墳時代中期)、大阪府長原遺跡(6世紀から7世紀)がある。水田址及び畦畔の年代は、第7層の水田及び畦畔から遺物は全く出土していないが第8層では弥生時代後期中葉(西の辻E・D式)の土器が出土し、第4層では弥生時代後期新段階(北鳥池下層式)から庄内式にかけての遺物が出土していることから、弥生時代後期の新段階と考えられる。



第17図 江戸時代の遺構

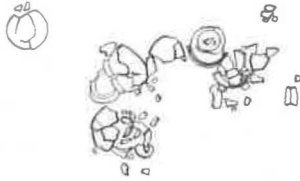


第18図 鎌倉時代～室町時代の遺構



第19図 弥生時代の遺構

A 2



$\bar{Y} = -36,167$

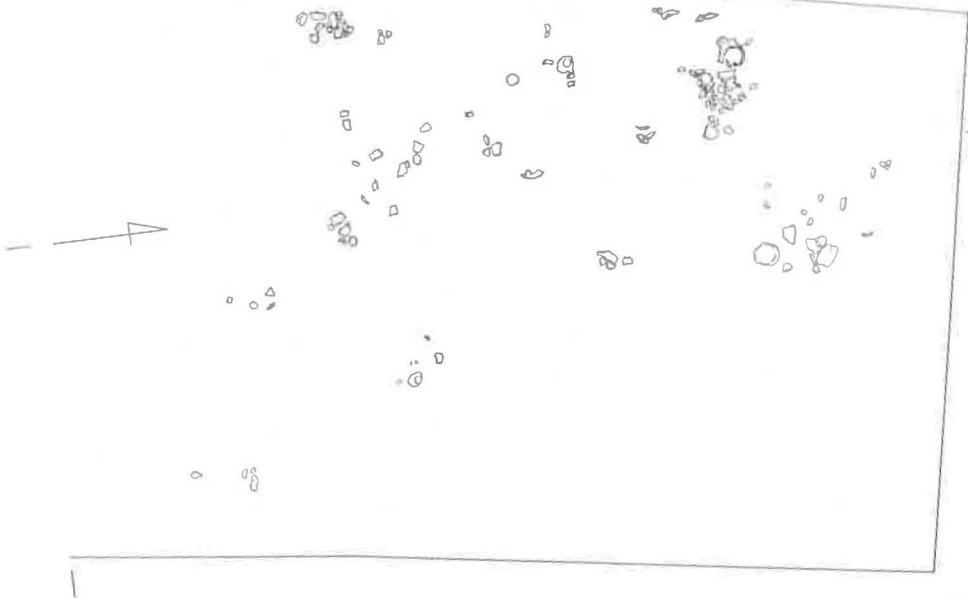
$X = -149,645$

$X = -149,640$

$X = -149,640$

$X = -149,635$

A 1



$\bar{Y} = -36,167$

第20図 第4層遺物出土状況

IV. 出土遺物

今回の調査では、瓦、弥生土器、土師器、瓦器、陶器、磁器、石製品などが出土した。出土遺物の整理は、遺構ごとに、その埋土、堆積土から取り上げられたものを中心としたが、包含層からも良好な出土遺物があったため、これらをそれぞれ種類、器種に分けて記述する方法で行った。若江遺跡では、遺跡の存在期間が弥生時代に始まり、古墳時代、そして歴史時代と約1700年もの長きにわたり、断続的あるいは連続して同一場所で生活が営まれた。そのため新旧遺構の重複もはなはだしく、また先行する時期の遺物を多く含んだりしている。このことから、遺構の時期決定に際しても遺構の廃棄埋没した時期、あるいは使用を終えた時期は遺物の上から確認できるが、構築された時期と存続期間は決定しがたい状況にある。したがって今回の遺構の時期も、使用を終え、廃絶された時期が中心となる。

井戸 1

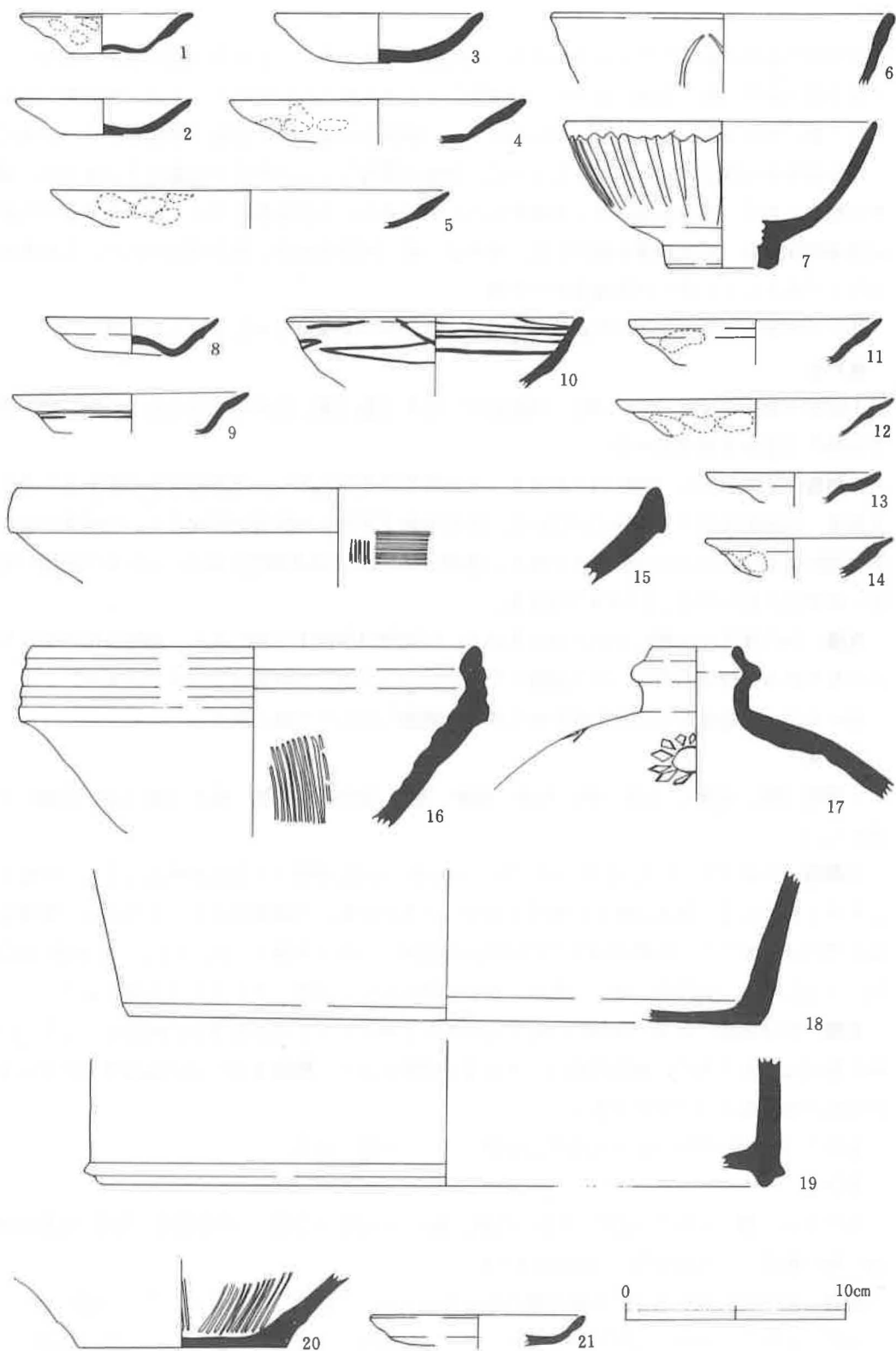
出土量が少なく、いずれも細片であるため、実測はできなかった。土師器皿・羽釜、弥生土器高杯・甕、須恵器杯、東播系の須恵器鉢、瓦器羽釜、備前焼播鉢、唐津焼皿、美濃焼皿、伊万里焼椀が出土した。須恵器鉢は捏鉢で、口縁部の上下が拡張し、玉縁状となったもので、魚住窯系の14世紀代のものと思われる。瓦器羽釜は、やや内傾して立ち上がる頸部の外面に段を2段めぐらせ、鐙を水平にはりつけ、端部に沈線をめぐらせたものである。備前焼播鉢は、体部の小片であるため時期は不明であるが、幅3.3cm、15本よりなる櫛状施文具により播目を施す。唐津焼皿は、灰釉皿底部で見込みに重ね積みのための砂目がついている。美濃焼皿は、灰釉折縁皿で、口縁部は短く水平に延び、端部は上方に肥厚し、短く立ち上がる。大窯Ⅳ期⁽³⁾の製品と思われる。伊万里焼より18世紀前後に廃絶したものと思われる。

井戸 2

土師器（皿・羽釜）、瓦器（播鉢・甕・火舎・羽釜・椀）、須恵器（壺）、陶器（備前焼播鉢）、輸入磁器（青磁椀）、磁器（伊万里焼椀）、弥生土器（甕）、瓦が出土した。

土師器 小皿（1、2）、中皿（3）、大皿（4、5）がある。1の体部は直線的に立ち上がる。口縁部は肥厚ぎみで、端部はやや尖り気味におさめる。底部中央部は上方へ突出する。体部外面はユビオサエ、内底面は一方向の直線ナデ。体部内面及び口縁部は、時計回りのナデを施す。色調は2.5Y8/2灰白色である。大皿4、5は平底であるが、成形・調整法は小皿1と同様である。色調は4、5とも7.5Y8/1灰白色である。2、3は平底で、体部は緩かに内弯しながら外上方に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。体部外面には指頭圧痕があまりみられない。内底面は直線ナデ。体部内面と口縁部は時計回りのナデを施す。胎土には1mm大の石英と、0.1mm以下の細かい金雲母がみられる。色調は、2が10YR8/3、3が7.5YR8/3浅黄橙色である。

青磁 6は横田・森田分類・編年⁽⁴⁾の龍泉窯系青磁椀Ⅰ-5-a類にあたるもので、体部外面



第21図 井戸出土遺物

に片切彫で蓮弁を表現したものであるが、鑄や間弁は失われて、蓮弁部の盛り上がりもない。上田分類・編年⁽⁵⁾のB-II類にあたり、14世紀によくみられるものである。7は上田分類・編年のB-IV、亀井分類・編年⁽⁶⁾のB-2にあたる。口縁直下に連続する弧線を線刻し、その山あるいは谷部分から任意に縦線を下したもので、剣頭が蓮弁としての単位を意識せずに施され、蓮弁の形をなさず、その表現は全く形骸化したものである。大宰府推定金光寺跡、根来寺坊院跡、紀淡海峡採集品、山梨新巻本村出土品、熊本浜の館、同竹崎城跡、新潟華報寺経沢、石川波佐谷などで出土している。16世紀前半～中葉。

井戸2は伊万里焼椀から17世紀後半から18世紀にかけて構築されたものと思われる。

井戸3

土師器(皿、羽釜)、瓦器(椀)、須恵器片、弥生土器(甕、高杯)、鉦滓が出土した。出土量では弥生土器が6割を占める。

土師器 小皿(8)、中皿(9)がある。8は底部中央が突出し、体部は緩かに外上方に立ち上がる。口縁端部は尖りぎみにおさめる。体部外面下半及び外底面は指押さえ。内面及び口縁部は周縁に沿って時計回りのナデを施す。色調は10YR7/2灰黄褐色である。9も8と同様の成形・調整法と思われる。2.5Y8/3淡黄色。

瓦器 10の体部は内弯しながら立ち上がる。口縁部は内傾する面をもち、端部はやや尖りぎみにおさめる。体部内面はハケで調整したあとヘラミガキ。口縁部はヨコナデを施す。

井戸3は土師器皿から15世紀前半から中葉に廃絶したものと思われる。

井戸4

土師器(皿、羽釜)、瓦器(椀、火舎、播鉢、甕)、須恵器片、瓦、弥生土器(壺、高杯)が出土した。

土師器 小皿(13、14)、中皿(11、12)がある。小皿、中皿とも底部中央部は上方へ突出するものと思われる。体部は緩かに外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。体部外面下半はユビオサエ。体部内面及び口縁部は時計回りのナデを施す。11、13は2.5Y8/2灰白色、12、14は2.5Y8/3淡黄色。他に平底から緩かに外反しながら短く立ち上がる小皿もある。

瓦器 15は播鉢である。直線的に外上方に延びる体部と上下に拡張する口縁部からなる。口縁上端は丸くおさめる。体部内面はハケによる調整のあと、楯状工具により播目をつけている。口縁部の内外面はヨコナデを施す。

井戸4は土師器皿から15世紀前半に廃絶したものと思われる。

井戸5

弥生土器(甕、高杯)、瓦器(火舎、播鉢、甕)、土師器(羽釜)、須恵器片、陶器(備前焼播鉢、瀬戸焼瓶子、常滑焼片)、瓦が出土した。

陶器 16は備前焼播鉢で、体部は凹凸をもちながらやや内弯して立ち上がる。口縁部は上下に大きく拡張し、外面には凹線が3条めぐる。口縁端部は内傾する面をもつ。体部内外面ともヨコナデを施す。体部内面には幅2.7cm、9本よりなる楯状工具により播目をつけている。色調

は7.5R4/4にふい赤褐色である。17は瀬戸焼瓶子である。中国宋代に数多く作られた梅瓶を模倣した灰釉瓶子で、口頸部は直立し、中位の突帯部より外弯しながら内傾し、端部は丸くおさめる。肩部には文様を刻んだ施文原体を器面に押圧した印花文が描かれている。色調は7.5Y6/2灰オリーブ色で、細かい貫入がみられる。14世紀のものであろう。

瓦器 18、19は火舎である。18は平底の底部から外上方に直線的に伸びる体部をもつ。底部内面周縁と体部内面はヨコナデ。体部外面はハケによる調整のあとナデ。底部は離れ砂を用いたのか、細かい砂が表面に付着している。色調は内面がN6灰色、外面が10Y7/1灰白色である。19の体部は直立し、底近くに1条の突帯をめぐらす。体部内面はヨコナデ、外面は縦方向のヘラミガキで平滑に仕上げられている。胎土には細かい長石、金雲母を含む。5Y3/1オリーブ黒色である。

井戸5は備前焼播鉢から16世紀後半に廃絶したものと思われる。

井戸6

土師器（皿、羽釜）、瓦器（椀、播鉢）、弥生土器（壺、甕）、須恵器片、瓦が出土した。

瓦器 椀と播鉢がある。椀は体部外面にヘラミガキがみられず、高台も三角形で低いものが貼付けられている。大和型の椀である。13世紀中葉。20は播鉢である。体部外面はハケによる調整のあとナデ。内面は磨耗が著しいため不明。体部内面には2.9cm、11本よりなる櫛状施文具により播目を施す。内面は2.5Y7/2灰黄色、外面はN4灰色である。

土師器 21の中皿は、体部が外上方に短く立ち上がり、外面に稜を形成する。口縁端部は丸くおさめる。細かい金雲母、くさり礫を含む。5YR7/4にふい橙色。他に1、11、13と同じ成形・調整法、色調の皿がある。

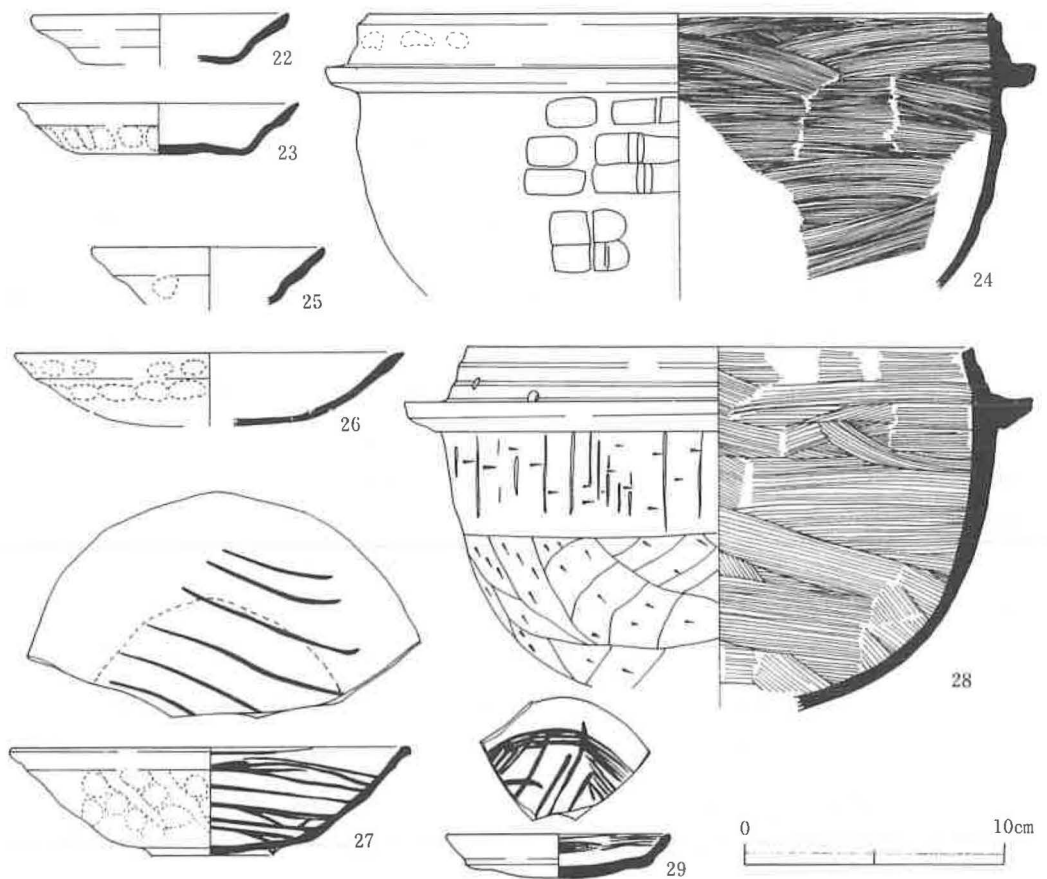
井戸6は土師器皿から15世紀前半に廃絶したものと思われる。

溝6

土師器（皿、羽釜）、瓦器（椀、羽釜）、須恵器（鉢、甕）、弥生土器（壺、高杯、甕）、瓦が出土した。

土師器 白色系の中皿である。平底であるが、底部外面は指頭圧痕が多くみられ、いびつで凹凸をなす。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖りぎみにおさめる。底部内面は直線ナデ、体部内面と口縁部外面は時計回りのナデを施し、体部外面にナデによる稜をみせる。22は細かい金雲母、角閃石、長石を含む。2.5Y8/2灰白色。23も鉱物を少量含む。2.5Y8/3淡黄色。

瓦器 椀と羽釜がある。椀は13片中1点の大和型を除き、和泉型に属するものである。時期は12世紀中葉から13世紀後半までである。羽釜は菅原分類編年⁽⁷⁾の山城F型（24）と撰津F1型がある。24の体部は垂直に立ち上がる。口縁上端は、外傾する面をもち、凹線を施す。端部は尖りぎみにおさめる。口縁部直下に短い鰐を水平にめぐらす。体部外面はユビオサエ、内面は板などによるナデ（ハケよりも細かく条痕が明瞭ではない）。口縁部と鰐はナデによる調整を施す。撰津F1型は直立ないしやや内傾して立ち上がる体部をもつ。口縁上端と外面に凹線を施



第22図 溝出土遺物

す。口縁部外面下半はユビオサエ、上半はヨコナデ。体部内面はハケによる調整である。

須恵器 東播系の捏鉢で、口縁部の上下が拡張し玉縁状となったもので、魚住窯系14世紀に属するものである。

土師器皿より15世紀前半と思われる。

溝 8

土師器 (皿、羽釜)、瓦器 (椀、羽釜、甕)、須恵器 (甕)、弥生土器 (甕、壺)、瓦が出土した。

土師器 小皿、中皿、大皿がある。25の体部外面下半をユビオサエ、体部内面及び口縁部は時計回りのナデを施す。2.5Y7/2灰黄色。26は平底ぎみの底部から、体部は直線的に立ち上がり、口縁端は丸みをもっておわる。ユビオサエ成形の後、口縁部外面、内面にヨコナデ⁽⁷⁾調整を施す。7.5YR8/2灰白色。羽釜は大和B1型である。「く」の字形に外反する口縁部で、口縁端部を内側に折り返す。細かい長石、石英、チャートを多く含む。5Y8/3淡黄色。

瓦器 椀は見込みに斜格子、平行線の暗文をもつものから、粗いラセン状のミガキで見込みに暗文がみられないものまでである。27は見込みに平行の暗文がみられるものであるが、体部内

面のミガキが7～8回の圏線と粗くなり、外面のヘラミガキはみられない。体部外面下半は、ユビオサエによる凹凸が激しい。口縁部はヨコナデ。高台は、断面三角形で幅が狭く低いものを貼り付けている。炭素の吸着が悪く、2.5Y8/1灰白色を呈する部分が内面の半分を占める。羽釜は河内D1b型⁽⁷⁾と、摂津F2b型⁽⁷⁾がある。28は河内D1b型で内傾する口頸部の外面に段を2段めぐらす。口縁端部には凹線がめぐる。罫は水平よりやや上向きにつける。端部には凹線がめぐる。口頸部には相対する面に、焼成後に穿孔された径5mm大の孔が3個認められるが、破損部分があるため、もともとは4個（2個1対）あけられていたものと思われる。体部内面はハケによる調整、口頸部と罫はヨコナデ、体部外面はヘラケズリである。胎土には長石、石英等の1～3mm大の石粒を多く含む。体部内面の60%、口頸部の40%に炭素の吸着がみられるだけで、他は2.5Y8/1灰白色を呈する。摂津F2b型は、直立ないしは内傾する口頸部をもつ。口縁上端は肥厚し、内端がやや突出する。口縁上端に1条の凹線をめぐらせる。口頸部外面には明瞭でない凹線が2条めぐる。体部内面はハケ、口縁部はヨコナデ調整を施す。甕は5cm×7cm、6cm×6cm大の胸部破片が2点ある。綾杉状のタタキメをもつものは、タタキメの幅が2～3mmと細かいもので、炭素の吸着、焼成も良好で、外面はN3暗灰色を呈する。平行タタキメをもつものは、タタキメの幅が4～5mmと太いもので外面には炭素の吸着がみられず、内面に吸着がみられる。外面は5Y8/1灰白色、内面はN4灰色である。

溝16

土師器（皿、羽釜）、瓦器（椀、皿）、須恵器片、弥生土器（甕、高杯）、瓦が出土した。

土師器 小皿と大皿の小片が出土している。小皿は3タイプが認められる。1つは体部が外弯ぎみに立ち上がり、外面に稜を形成するもの。内面及び体部外面に強いナデ調整を施す。その次は体部が内弯しながら立ち上がり、外面に稜を形成しないもの。内面及び体部外面はヨコナデ調整を施す。今1つは短く外上方にのびる体部をもつものである。体部外面に稜を形成し、口縁端を丸くおさめる。内面及び体部外面はヨコナデ調整を施す。大皿は1点だけで、体部は内弯して立ち上がり、上半で2回外反する。体部は2段のヨコナデ調整を施す。

瓦器 椀は大和型と和泉型がある。大和型は1点のみで、口縁部内面に沈線をめぐらす。口縁部を強くヨコナデしたあと、1mmの太さのミガキ調整を内外面に施す。器壁は厚い。和泉型は体部内外面を幅2mmの太さのミガキ調整を施す。口縁部のヨコナデが顕著で、そのために外反するもの（1点）とそうでないもの（3点）がある。見込みは格子の暗文である。高台は、低くて（3mm）断面が台形を呈するものと、高くて（6mm）安定したものとがある。皿（29）は、外反しながら短く立ち上がる体部をもつ。底部と体部の境界に稜をもつ。口縁端部は丸くおさめる。底部外面はユビオサエのため凹凸が激しい。内面は10～12回の圏線状のミガキをしたあと平行の暗文を施す。体部内面にも7回の圏線状のミガキがみられる。N4灰色。

溝15

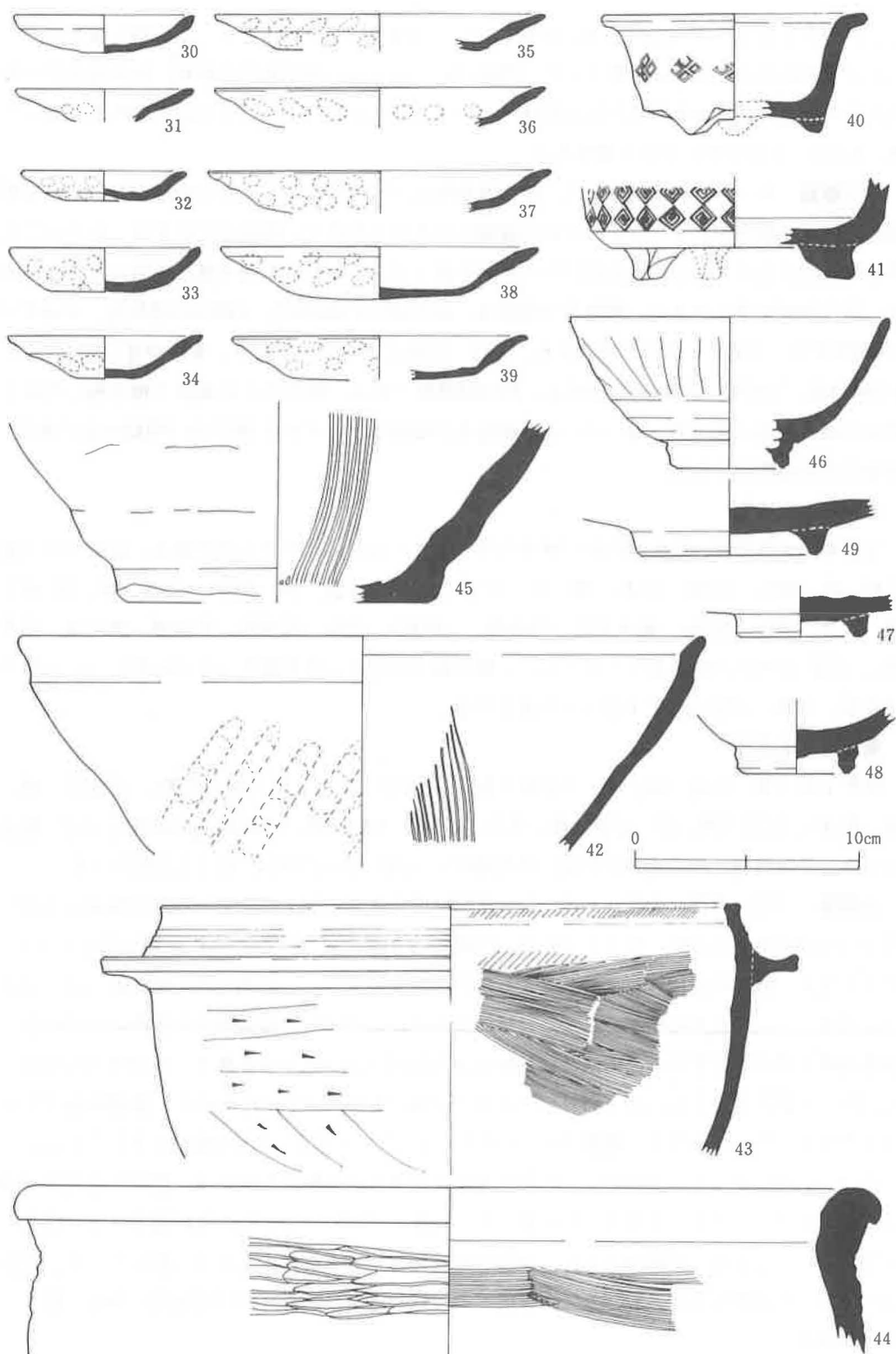
土師器（皿、羽釜、小盃）、瓦器（椀、皿、甕、火舎、香炉、羽釜、播鉢、鉢）、陶器（備前焼播鉢、常滑焼甕）、輸入磁器（青磁椀、白磁盤、天目茶椀）、須恵器（壺、高杯、甕、鉢）など

が出土した。

土師器 小皿、中皿、大皿があるが、大皿の出土量が多く7～8割を占める。30～32は小皿である。30は緩やかに内弯しながら立ち上がる。口縁部外面はヨコナテにより稜をもつ。口縁端部は丸くおさめる。31は平底から緩やかに外反しながら立ち上がる。体部外面下半はユビオサエ、体部内面と口縁部は時計回りのヨコナテ調整を施す。32の体部は緩やかに外上方に延びる。体部から口縁部にかけての器壁が厚い。体部外面下半はユビオサエ、体部内面と口縁部は周縁に沿って時計回りにナデ上げる。口縁部に煤の付着がみられる。色調は30が2.5Y8/3淡黄色、口縁部はやや尖りぎみにおさめる。内面と口縁部はヨコナテ調整を施す。2.5Y8/2灰白色である。35～39は大皿である。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。口縁端部はやや尖りぎみにおさめる。口縁下がやや肥厚する。体部外面はユビオサエ。底部は直線ナデ、体部内面と口縁部は内底面周辺に沿って時計回りのナデを施す。38、39は強くナデしているため稜をもつ。36、37、39は2.5Y8/2灰白色、35、38は7.5Y8/1灰白色である。羽釜は内弯ないし内傾しながら立ち上がる口頸部をもつ。口縁端部は平坦面をつくる。口頸部外面は凹線を2条めぐらす。口頸部内面はハケによる調整後強いヨコナテを施す。外面は2.5Y8/2灰白色、内面は2.5Y7/2灰黄色である。小盃は推定直径5.2cm、高さ2.4cm。体部は内弯しながら立ち上がる。口縁部内外面をヨコナテする。7.5Y8/2灰白色である。

瓦器 火舎は6点の破片のうち4点が円形、2点が方形である。円形のうち体部が内弯し、口縁上端に平坦面を形成し、内端は下方へわずかに突出するものが2点、外上方に大きく開く体部をもつものが2点ある。方形のものは同一個体と思われ、直立して立ち上がった体部に内側へ屈曲してのびる口縁部をもつ。口縁上端は幅の広い面をもつ。外面口縁直下に一条の凸帯を貼付けている。いずれの火舎も、ヘラミガキが丁寧である。香炉は2点ある。40は直線的に外上方に立ち上がる体部に、屈折して短く水平に延びる口縁部をもつ。底部に3ヵ所短い脚がつく。体部内面はヨコナテ、体部外面・口縁部・底部外面はヘラミガキを施す。体部外面に菱形文を間隔をあけ一巡して押印している。N3暗灰色。41は直立ないしはやや外傾して立ち上がる体部をもつ。底部に3ヵ所の短い脚がつき、体部外面に雷文の押印をめぐらす。N6灰色。播鉢(42)は直線的に立ち上がる体部に外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸みをもつ。体部内面、口縁部はヨコナテ、体部外面はユビオサエによる指頭圧痕が目立つ。体部外面には2.7cm幅、10本よりなる櫛状工具で底部から口縁部に向って播目をつける。外面N4灰色、内面2.5Y8/2灰白色。羽釜(43)は、河内D1型で、やや内傾して立ち上がる頸部の外面に段を2段めぐらせる。口縁端部は肥厚し、平坦な面をもつ。鏝は水平よりやや上向きに取り付く。体部内面はハケメ、外面はヘラケズリ、口縁部、鏝部はヨコナテ調整を施す。体部外面5YR2/1黒褐色、内面2.5Y6/1黄灰色。甕(44)は、体部があまり張らずに内弯して立ち上がり、口縁部を短く外方に曲げ、端部を折り返して玉縁状にふくらませる。体部内面はハケメ、外面は平行タキ、口縁部はヨコナテ調整を施す。外面7.5Y8/2灰白色、内面7.5Y5/1灰色。

陶器 備前焼の播鉢片が多い。口縁部が上方に強く立ち上がり、口縁上端面を角ばらせた感



第23图 溝15出土遺物

じで内傾する面をもつもの、上方に立ち上がるが口縁の端部が丸味をもつもの2種がある。いずれも口縁部外面はほぼ平坦であり、凹線はめぐらない。間壁編年のIV期⁽⁸⁾、16世紀前半～中頃と思われる。挿目は放射状と斜放射状とがあり、櫛状工具は2cm、9本が2個体、2.2cm、8本、2.5cm、7本がそれぞれ1個体ある。

輸入磁器 46～48は青磁碗である。46は体部外面に片切彫による蓮弁文を描くが、蓮の先端部が不明瞭で蓮弁の形をなさず、任意に縦線のみを下すだけで、凹凸などにより、かろうじて弁と判断できるにすぎない。高台はすべて削り出しである。釉は畳付を越えて高台内にまわりますが、高台内面途中で止まる。釉色及び磁胎は、46が10G6/1緑灰色、5BG6/1青灰色、47が7.5Y6/2灰オリーブ色、5BG7/1明青灰色、48は二次的に火を受けており、変色が著しく、7.5Y8/2灰白色、10GY8/1明緑灰色である。49は白磁盤である。削り出しの高台で釉を施したあと、畳付と高台内面の釉を削り取っている。釉色及び磁胎は、いずれも10GY8/1明緑灰色である。磁胎には黒色微粒を含む。

包含層出土遺物

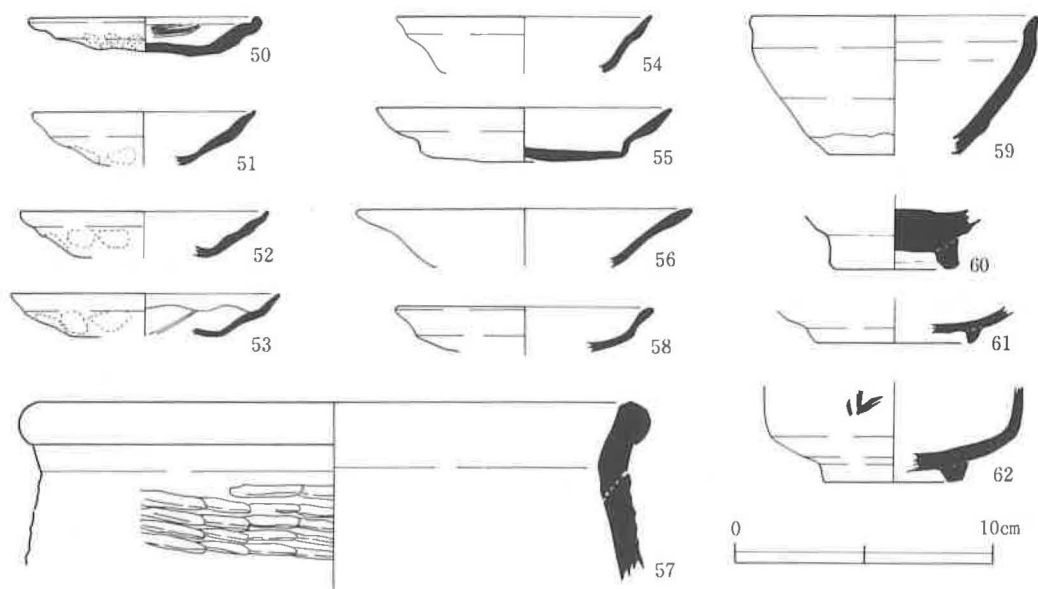
包含層出土遺物は、弥生時代から歴史時代（近世・近代）に至るものがある。弥生土器（甕、高杯、鉢、壺）、土師器（高杯、甕、皿、羽釜）、須恵器（甕、杯、捏鉢）、瓦器（椀、皿、羽釜、甕、火舎、香炉、播鉢）、輸入磁器（青磁碗、白磁碗）、陶器（備前焼、常滑焼、瀬戸焼、美濃焼）、磁器（伊万里焼）、瓦などがある。3層は弥生時代から歴史時代（江戸時代）のものを多く含み、4層、8層は弥生土器のみを出土する。

第3層出土遺物

弥生土器（甕、高杯、鉢、壺、手焙形土器）、土師器（高杯、甕、皿、羽釜）、須恵器（甕、杯、捏鉢）、瓦器（椀、皿、羽釜、甕、火舎、播鉢）、輸入磁器（青磁碗、白磁碗）、陶器（備前焼播鉢、常滑焼甕、瀬戸焼天目茶椀、美濃焼皿）、磁器（伊万里焼）、瓦などが出土した。

土師器 小皿、中皿、大皿がある。50の体部は内湾ぎみに低く立ち上がる。口縁部は外折し、端部は内側に折り返され、丸くおさめる。内底面は直線ナデ、体部、口縁部は時計回りのヨコナデを施す。底部外面はユビオサエによる指頭圧痕が目立つ。7.5YR8/3淡黄橙色。51～54はやや外反して立ち上がる体部をもつ。口縁部はわずかに内湾し、端部は尖りぎみにおさめる。体部外面下半はユビオサエ、内面及び口縁部は時計回りのヨコナデを施す。2.5Y8/2灰白色、2.5Y8/3淡黄色を呈する。55も51～54のものと同様の成形、調整法であるが、体部外面下半のユビオサエが強いため大きく屈曲する。10YR7/4にぶい黄橙色。56は直線的に立ち上がる体部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。体部外面にユビオサエ成形痕を留める。体部内面及び口縁部に時計回りのヨコナデを施す。57は甕である。体部は緩やかに内湾し、口縁部は外方へ屈曲し、端部は外折して肥厚し玉縁状となる。体部外面には幅4～5mmの右下がりの平行タタキ、内面はハケによる調整を施す。5YR8/4淡橙色。羽釜は河内B1⁽⁷⁾e型で内傾する頸部に外方に肥厚する口縁部をもつ。

瓦器 椀は内底面を密にみがき、高台径が大きく、高台が高い11世紀代のものから、高台が



第24図 第3層出土遺物

消滅し、ミガキの全くみられない14世紀末までのものがある。大部分は見込みが平行線状の暗文で、体部外面のヘラミガキが消滅する前後、12世紀末から13世紀中葉にかけてのものである。皿(58)は平底の底部から外上方にやや外反しながら短く立ち上がる口縁部をもつ。口縁部は強いヨコナテを施す。羽釜は摂津F1型と河内D1型とがある。火舎は平面形態が円形のものと同方形のものがある。体部は直立するもの、外傾するもの、内弯して立ち上がるものがある。播鉢は口縁部を上下に肥厚させたもので、断面は三角形を呈する。体部内面はハケ、外面はヘラケズリ調整を施す。

輸入磁器 青磁碗は体部外面に片切彫の鎬蓮弁文をもつもの、蓮弁をもつが鎬が失われたもの、蓮弁がなく櫛目を縦に入れたもの、無文のものがある。色調は5G6/1緑灰色、7.5GY6/1緑灰色である。60は高台を断面四角に削り出したもので、高台部豊付およびその内部は露胎である。底部の器肉が厚い。10YR7/4にぶい黄橙色を呈する。白磁碗は横田・森田分類・編年⁽⁴⁾のV類に属するもので、体部の器肉が全体に薄く、口縁部を少し外反させている。口縁端部は丸くおさめている。10GY8/1明緑灰色を呈する。61は高台部が直立か内傾ぎみの細く立つもので、高台豊付部分のみを露胎とする皿である。釉は高台内面は白色であるが、外面や底部内面は7.5GY8/1明緑灰色である。62は染付碗である。高台部より腰部まで斜め外方に延び、屈曲して口縁部まで直線的に立ち上がる腰折れの碗である。高台は割合厚く、幅広に削り出され、真直ぐかやや外開きとなる。豊付は露胎で高台内面には砂が付着している。体部外面には呉須で草花文を描くが、発色が鈍く5B5/1青灰色を呈する。釉は10GY8/1明緑灰色である。

陶器 59は瀬戸焼天目茶碗である。体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。体部下半や高台部つけ根にヘラケズリの痕跡がみられる。磁胎は2.5Y8/2灰白色、釉色の鉄釉は艶のない5YR4/4にぶい赤褐色である。釉は均一によく熔融して、見事な釉

調を示している。

第4層出土遺物

弥生土器（甕、高杯、鉢、壺、手焙形土器）が出土した。

甕形土器A（63、64） イチジク形の体部に「く」の字状に外折したのち、口縁端部を上方につまみ上げて立ち上がる口縁（いわゆる受口状口縁）をもつものである。口縁端部外面はヨコナデにより凹線様のものが1条めぐる。63は器体の上から $\frac{1}{3}$ のところに最大腹径を有する。体部外面は右上がりのタタキメがみられるが、ハケにより消されている所もみられる。内面はハケによる調整である。胎土には、0.3~1.0mm大の長石、石英が多く含まれている。7.5R2/1赤黒色。64の体部外面は右上がりのタタキメだけで、ハケによる調整はみられない。胎土には、金雲母、長石、石英を少量含む。10YR8/3浅黄橙色。

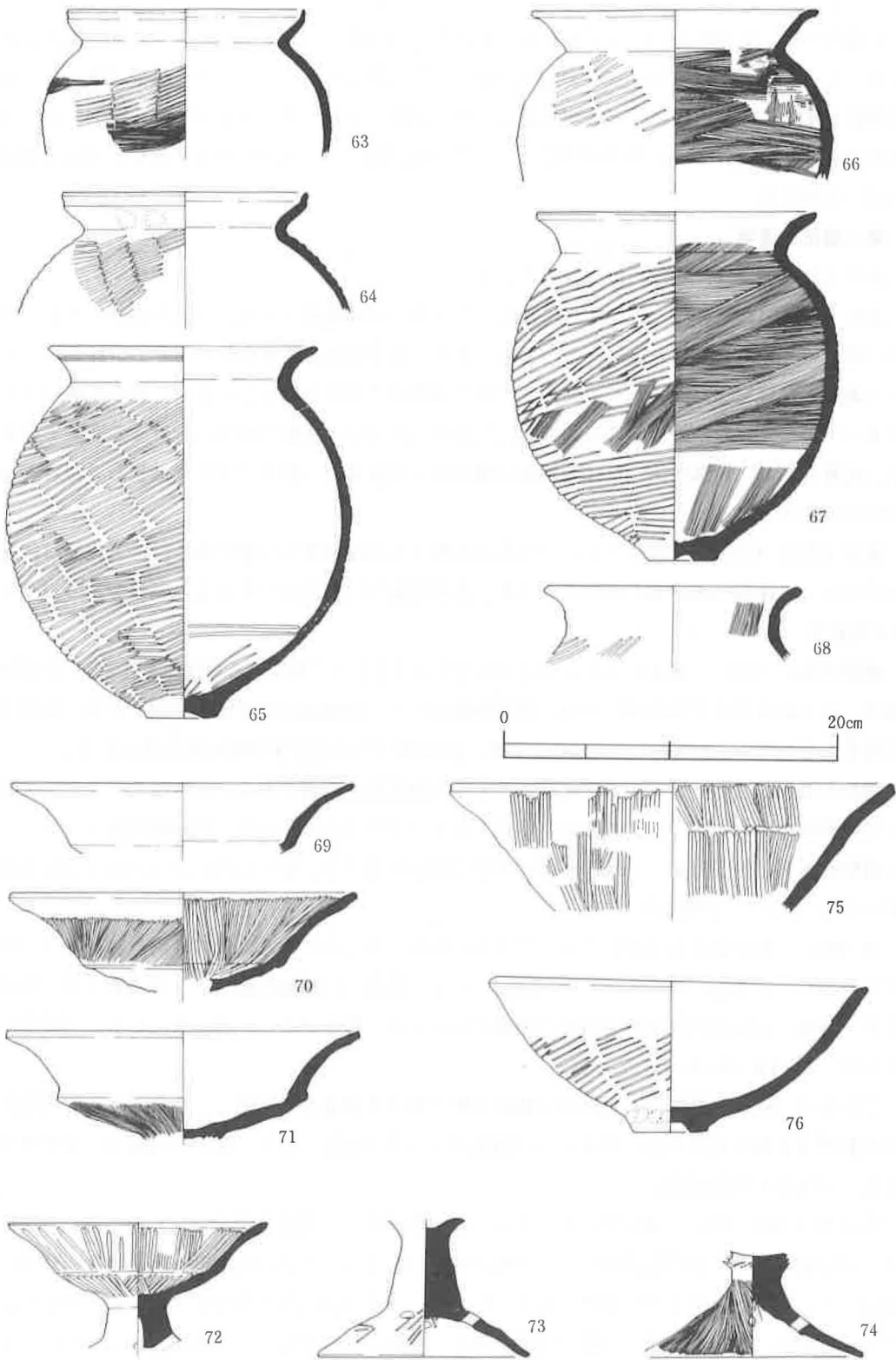
甕形土器B（65~67） 単純に「く」の字状に外折する口縁部をもつ甕である。最大腹径が体部中位にある。いずれも体部径が口縁部径を凌駕する。タタキメは右上がり、分割成形にともない、主軸の方向が異なるもの（65、67）がある。65は口縁部外面に半截竹管等による平行沈線が2条認められる。外面には煤が多く付着する。内面は器壁の磨耗、剝離のため調整は不明である。石英、長石などの石粒を多く含む。外面5YR2/1黒褐色、内面10YR8/2灰白色。67は体部中央部の接合部を中心に部分的なハケ調整を施している。内面は下半がタテ方向のハケ、上半がヨコ方向のハケで調整する。

甕形土器C（68） 体部上半からゆるやかなカーブをもって外反する口縁部を有する。外面は右上がりのタタキメ、内面はハケメ、口縁部は強いヨコナデを施す。

高杯（69~74） 曲折点より外反して口縁端部にいたる杯部をもつ。口縁端部を丸くおさめるもの（69、72）、口縁端部に面をもち、角ばっておさめるもの（70、71）がある。69は内外面ともヨコナデ、70、72はヘラミガキ、71は杯底部外面が放射状のハケメ、口縁部がヘラミガキ調整である。72の脚部は、短い中空の脚柱部に、屈折し角度をかえて広がる裾部をもつ。脚柱部には竹管、あるいは棒状のもので2ヵ所に円孔が穿たれている。胎土には0.3~3.0mm大の長石粒を多く含む。10YR7/3にぶい黄橙色。73は中実の脚柱部に、屈折し角度をかえて広がる裾部をもつ。端部は丸くおさめる。裾部には径0.8cmの円孔を外面より4箇所穿たれている。脚柱部はタテ方向のヘラミガキ、裾部はヨコナデ調整である。74は中実の脚柱部からなだらかに裾部へと移行する。脚部外面は放射状の密なヘラミガキ、内面はヨコナデ調整、脚柱部下面にはしほり痕がみられる。73、74とも円板充填手法をとるものである。

鉢A（75） 口縁部が僅かに「く」の字状に外折したものである。やや大型の鉢である。口縁端部はつまみ上げ気味にヨコナデを施し、擬凹線を施す。口縁部のヨコナデのあと、内外面ともヘラミガキを施す。

鉢B（76） 直口の鉢である。体部、口縁部が内湾して立ち上がる半球状のもので、底部は突出した上げ底を呈する。体部外面は右上がりのタタキメ、内面はハケメ、口縁部はヨコナデ、底部外面はユビオサエによる調整を施す。



第25図 第4層出土遺物

手焙形土器 受口状の口縁部を有する、腹部の張った鉢形の器体に、半ドーム状の覆いをかぶせた土器である。破片から推定すれば、腹部下半に凸帯をめぐらし、その凸帯にはヘラによる刻目を施す。体部内外面、天井部外面はハケメ調整を施す。天井部下半には、櫛描の直線文、波状文を描いた後、ドーム開口部付近に、長さ2cm、幅0.5cm、高さ0.8cmの突帯を2.2cm間隔に縦に貼付ける。

第8層出土遺物

弥生土器（甕、鉢、壺、高杯）が出土した。

甕形土器A (79) 「く」の字状に外折したのち、口縁端部を上方につまみ上げて立ち上がる口縁（いわゆる受口状口縁）をもつものである。最大腹径は体部中位にある。口縁部はヨコナデ調整、口縁端部は丸みをもっておさめる。体部はタタキを施しているが、のち丁寧にハケによって消しているため、頸部に部分的にしかみられない。体部内面もハケによる調整であるが、乱雑である。体部外面、口縁部外面に煤が多く付着する。胎土に金雲母、長石を含む。7.5 YR5/3にぶい褐色。

甕形土器B (78) 単純に「く」の字状に外折する口縁部をもつ甕である。最大腹径は体部中位にある。体部外面は右上がりのタタキ、体部内面と口縁部はハケによる調整である。2.5 Y 6/2 灰黄色。

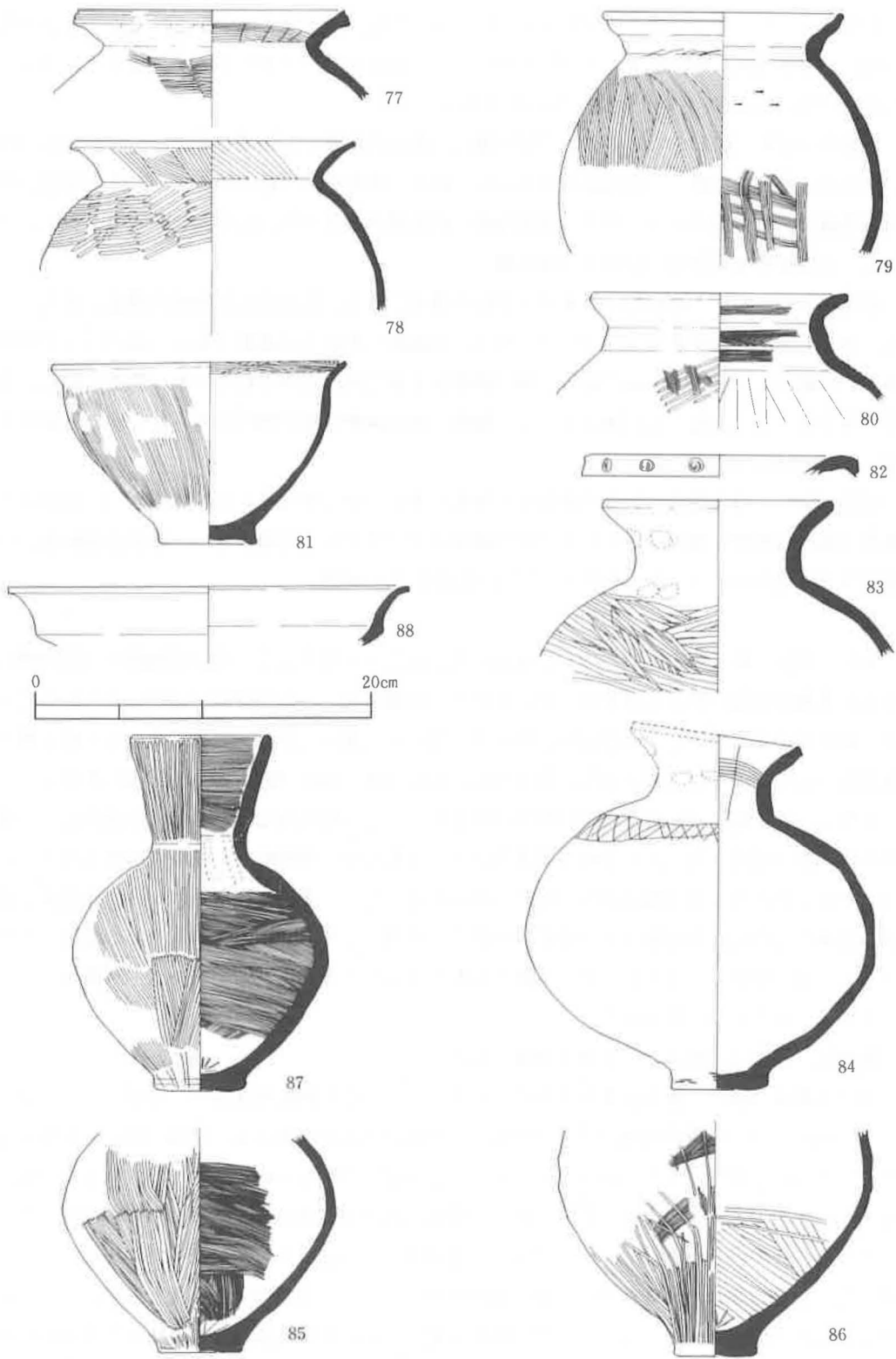
甕形土器C (80) 体部上半からゆるやかなカーブをもって外反する口縁部を有する。体部外面は、右上がりのタタキののちハケ、体部内面はハケ、口縁部はヨコナデ調整である。煤は全く付着していない。10 YR8/2 灰白色を呈す。石粒はほとんど含まず搬入品と思われる。

甕形土器D (77) 「く」の字状に外折する口縁部をもつ甕である。口縁端部を上下に拡張して擬凹線を2条施す。体部外面はやや右上がりのタタキののちハケ、口縁部内面はハケによる調整を施す。体部外面、口縁部外面には厚く煤が付着する。胎土には0.3~3.0mm大の長石を多く含む。2.5 Y7/2 灰黄色。

鉢 (81) 口縁部がわずかに「く」の字状に外折したものである。体部外面は右上がりのタタキののち、丁寧にハケでタタキを消している。体部、口縁部内面をハケで調整する。体部上半の外面、口縁部内外面に半円形の黒斑がみられる。胎土には0.5~5mm大の長石、石英を多く含む。2.5 Y6/3にぶい黄色。

広口壺A (82) 外反する口縁部の端部下半に粘土を補充して拡張し、これに竹管を押捺した円形浮文を貼り付けたものである。口縁部はヨコナデ調整である。胎土には長石、金雲母を含む。5 YR5/6 明赤褐色。

広口壺B (83、84) 球形ないしイチジク形の体部から、頸部を経てなだらかに外反して開き、口縁部に至る。口頸部は短い。83の体部外面はヨコないしは斜方向のヘラミガキ、体部内面はナデ、口縁部はヨコナデ調整である。胎土には0.3~8.0mm大の長石を多く含む。10 Y R6/3にぶい黄橙色。84は肩部にヘラ描の文様を施す。文様は肩部外周の1/2に施す。まず1.2~2.0cmの間隔で上下にほぼ平行する線を描き、右上から左下に斜線を13本描いたあと、左上から右下



第26図 第8層出土遺物

にX型となるように12本描く。左端のものだけは1本足らずX型とはなっていない。文様を描く前に、体部外面に外周を4～5分割する形でヨコ方向のヘラミガキを施す。胎上には0.1～1.0mm大の長石・石英を多く含む。2.5Y6/2灰黄色。

長頸壺(87) 球形ないしイチジク形の体部に直線的な長い口頸部を有するものである。87の口頸部は外上方に開く。口縁端部は丸くおさめる。器体中位に最大径をもつ。体部外面、口頸部外面はタテ方向のヘラミガキ、体部内面、口頸部内面はハケによる調整を施す。胎上には長石、金雲母を少量含む。2.5Y4/1黄灰色。

壺体部(85、86) 球形ないしイチジク形の体部である。広口壺や長頸壺の体部であろう。85、86とも体部外面がタテ方向のヘラミガキ、内面がハケによる調整である。85のハケメは10本/cmと細かく、86は3本/cmと粗い。85は調整が丁寧で凹凸はみられないが、胎上に長石、石英、金雲母を多く含む。7.5YR5/4にぶい褐色。86は調整が雑で凹凸がみられるが、砂粒は少ない。7.5YR5/4にぶい褐色。

高杯(88) 斜上方にのびる杯体部から角度を変えて短く外反する口縁部をもつ。口縁部と体部の境には明瞭な稜線がみられる。口縁端部はヨコナデによる面をもつ。体部は放射状、口縁部はヨコ方向のヘラミガキを施す。7.5YR5/3にぶい褐色。

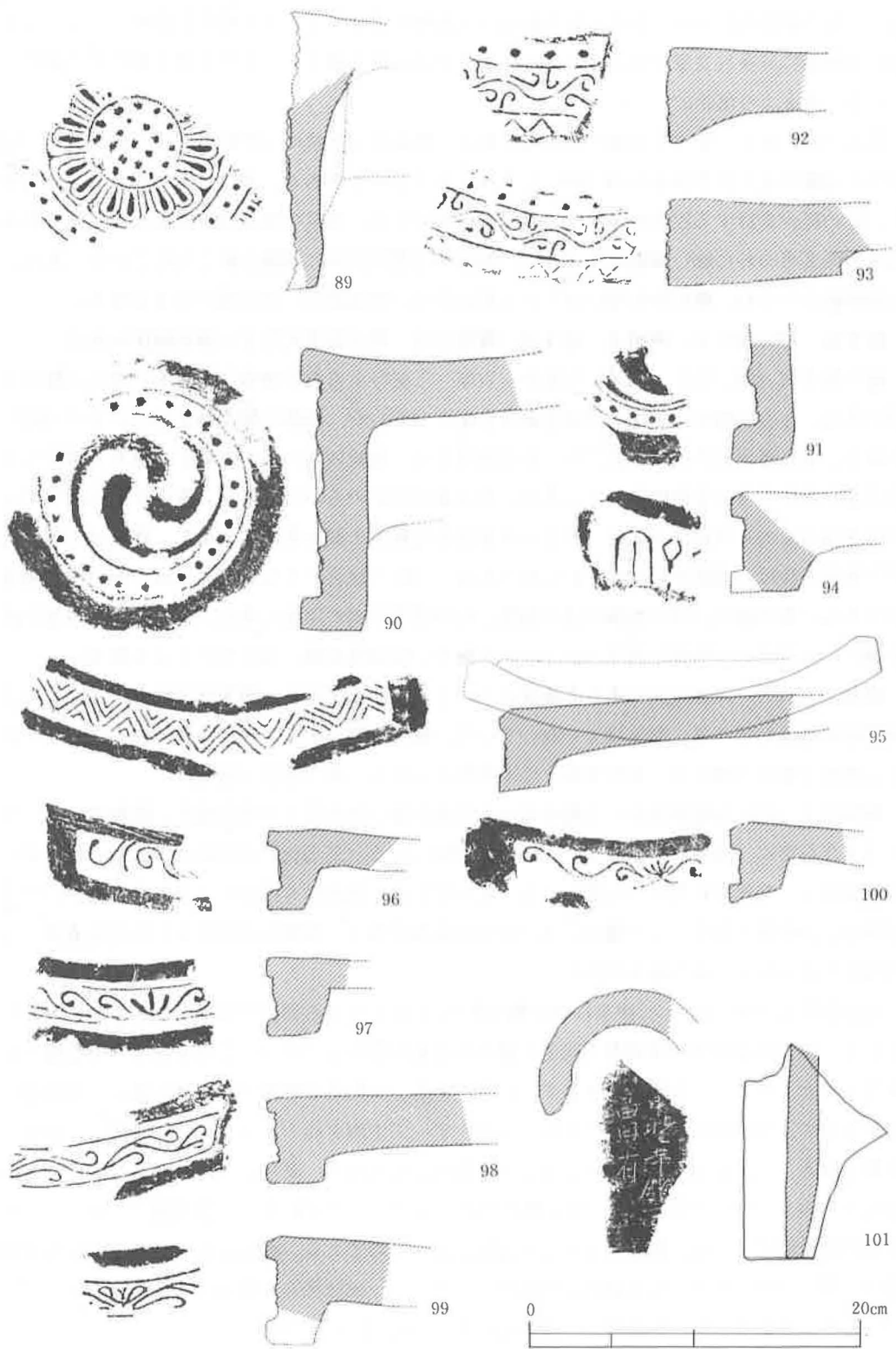
瓦

丸瓦、平瓦、軒瓦が主体であるが、鬼瓦や文字瓦なども出土している。时期的には奈良時代から安土桃山時代に至るものであるが、井戸2に使用されている瓦は江戸時代に入るものである。瓦が特に多く出土したのは溝15、井戸2、井戸6、溝8、溝6、溝9、井戸3と第3層の包含層からで、破片数で数えると、各々903、418、221、186、169、100、98、813となる。

瓦類のうち、軒瓦は総数で12種14個体が出土している。時代的な区分では、奈良時代から鎌倉時代の瓦は付近にあったとされる若江寺のものであるが、室町時代、安土桃山時代のものについては、若江寺と若江城の双方のものと思われる。ただ、溝15は埋ったのが、土師器皿、備前焼播鉢などから16世紀前半から中葉にかけての時期であり、溝の幅、深さなどの規模から考えると、城の堀あるいはそれに準じる機能を有していたと考えられることから、城関係のものが多いのではないかと思われる。

軒丸瓦 蓮華文、巴文など3種4個体がある。

複弁蓮華文(89) 複弁蓮華文を内区の主文とし、これを囲む外区部が二重縁となっているもの。内縁には二重圏線の中に連珠文を飾り、外縁は内面が内傾する三角縁に線彫変形蓮弁文⁽⁹⁾を配している。中房は大きく低いものであるが、周縁には圏線をめぐらさない。蓮子は周環が消失したもので、1+8+12の配置である。中房の蓮子は、間弁間を十字にまず5個ずつ配して4分し、その内を中央は2等分、外周は3等分する形で配する。花卉は中央の稜線で二面分割され、子葉は細長く丸味がある。弁端は切り込みがあり、先端は反転の状態を表わしている。花卉の輪郭と間弁は一連となり、弁中2個の子葉にはそれぞれ輪郭線のある特殊な重弁形複弁蓮華文⁽¹⁰⁾である。この花卉の類型は藤原宮跡6281型式⁽¹¹⁾、大阪片山廃寺、兵庫伊丹廃寺にある。復



第27图 瓦实测图

原した瓦当直径は17.6cmである。瓦当裏面の丸瓦挿入部分ではヘラで粘土を切りとっているが、丸瓦剝離面には布目文様が見られる。接合部分では粘土を補充し、ユビオサエやナデで調整している。溝8より出土。

巴文 (90、91) すべて左廻りの巴文である。巴文は勾玉状にくびれをもつものはない。起頭部の先端が丸くおさまるもの (90) と尖りぎみのものがある。90は巴文・珠文ともに肉厚で、巴の尾が先行する巴文の体部に接着し圏線状をなす。外区の珠文は復原すれば27個である。外区の珠文帯の外に細い圏線をめぐらす。91は珠文帯の内外に圏線をめぐらせている。瓦当には砂粒痕が見られ、離れ砂を用いたものと思われる。90は溝15、91は井戸4より出土。

軒平瓦 扁行唐草文、剣頭文、連珠文、幾何学文、均正唐草文など9種10個体がある。

扁行唐草文 (92、93) 内区に左端から右端へと扁行する波状唐草文を飾る。外区文様は上帯に珠文、左右の側帯と下端には線鋸歯文を配す (93) が、側帯の線鋸歯文がないもの (92) もある。奈良藤原宮跡6641型式⁽¹¹⁾にみられる唐草文は、連続波状の茎から蕨手2個を1単位とする支葉が派生するのを原則としているが、若江遺跡出土のものは、茎から蕨手2個が派生するのは下向のもの3単位分である。あとの9単位分は蕨手1個が茎から派生し、残りの1個は内区と外区を分ける圏線から付加された形である。これと組み合わせられる軒丸瓦は、89の複弁蓮華文である。顎の形は、92が無顎形式の割顎、93は段顎形式の深顎である。92、93は瓦当部上面が横位のヘラナデ、顎面は縦位のヘラナデを施す。92は第3層、93は井戸1より出土。

剣頭文 (94) 天地方向に走る直線群によって瓦当面を区分し、剣先状に仕上げることにより文様を構成している。剣先は上を向いている。剣頭は割合広く、子葉は長方形で先細りである。剣頭と剣頭の間には、先が菱形をなす間弁を入れる。第3層より出土。

幾何学文 (95) 左端中央から右端中央へ瓦当面全体に鋸歯文を7単位描き、鋸歯文によって区分された中に、相似形の鋸歯文をそれぞれ2個入れる。瓦当面には砂粒が多くみられ、離れ砂を使用し、製作されたものと思われる。瓦当部上面、顎面とも横位のヘラナデを施す。顎は段顎形式の中顎である。この幾何学文の類例は京都尊勝寺⁽¹²⁾、大阪長吉出戸4丁目所在遺跡⁽¹³⁾、河内寺跡⁽¹⁴⁾にみられる。第3層より出土。

均正唐草文 (96~100) 中央に中心飾を作り、これより左右相称に唐草文を派生させるものである。96は同遺跡第5次調査で同范と思われる瓦が出土しており、これをみると中心飾は小珠文1点と、その上に5葉下に2葉で、上上下下上と反転する線状の唐草文を描く。97は中心飾が3葉で、斜放射状に支葉が4本延びるが、すべて下側を向く。98、99は同型式で、中心に3葉をおき、下上下下と5反転を行ない、最後に同方向に一葉付け加える唐草を描く。100は中心に上向き5葉、下向き2葉の中心飾をおき、下上下と3反転する唐草を描く。96、99、100は離れ砂を用いている。顎はほとんどが浅顎に近いものである。調整は96、97、100が瓦当上面、顎面を横位のヘラナデ、平瓦部両面を縦位のヘラナデ、98は平瓦の凹面に布目跡、凸面は縦位のヘラナデである。96~98は溝15、99は井戸4、100は井戸5より出土。

連珠文 (図版24-102) 圏線に囲まれた中に8~9mm大の珠文を3個1単位として配列した

ものである。顎は段顎形式の中顎で、顎下面を横位にヘラナデする。井戸2掘形内出土。

文字瓦(101) 丸瓦の凸面に文字を刻んだものである。丸瓦は玉縁を伴うものと思われ、凸面に縦位のヘラナデ、凹面に布目痕が残る。側面は面取りを2面施し、1面は凹面に幅1.8cmの平坦な面をつくる。文字は玉縁部を上によれば、凸面中央の下端寄りに、先端が細い棒状のもので書かれたものと思われる。文字は左右2列に書かれており、「中埜寺領一郷 畠田ニ有」と読める。中埜寺についてはその所在や寺歴については不明であるが、中埜寺の寺領の一郷が、畠田という所にあったと解される。この畠田というのが若江地域にあったものかわからないが、若江地域の小字をみると、畠田は存在しないが、中野という小字が、現在の府道八尾枚方線沿い、近鉄奈良線の南500~600mの間に存在し、旧高野街道にも面する位置にある。

V. まとめ

今回の調査では、江戸時代の井戸2基、溝4条、室町時代の井戸4基、溝13条、弥生時代後期の水田畦畔を検出した。江戸時代の溝は、畑作に伴う畝の跡と思われ、江戸時代の商品作物としてさかんに作られていた綿などの栽培が行なわれていた可能性が高い。溝の周辺で検出された井戸についても、規模が中世の井戸に較べて大きく、貯水量も豊富であるし、当時の集落から離れた地点での検出であるため、畑作の灌漑用として使用されたのではないかと考えられる。

室町時代の遺構については、不明のものを除き、2つの時期に限定される。1つは15世紀前半であり、あと1つは16世紀後半である。15世紀前半に廃絶したものは井戸3、4、6、溝6、8、16世紀後半に廃絶したものは井戸5、溝15、17がある。この2つの時期は、若江地域の歴史の中でみると、若江城と大きくかわるものであると考えられる。享保19年(1734)、並河誠所、関祖衡らによって編纂された『日本輿地通志畿内部』には、「初、畠山義深の家臣、遊佐をして守護代となし、ここに居城せしむ」とある。畠山氏が史料の上で華々しく登場するようになるのは国清の時である。国清は建武新政に反抗した足利尊氏の有力武将として活動を開始し、和泉守護、ついで紀伊守護となって南朝軍と戦い、大いに戦功をあげた。観応の擾乱に際しては足利直義に依じて、和泉・河内守護を兼ねた。延文4年(1359)上洛し、南朝軍を攻撃、河内・紀伊守護に再任された。義深は国清の弟で、国清と行動を共にしており、国清が河内守護に任ぜられた時、義深が河内国に乗り込み若江城を築いたと考えられている。昭和61年3月に刊行された『藤井寺市史紀要第7集』の中に津川本畠山系図について記されており、義深は南征討使、越中守護〔貞治3年(1364)2月〕、越前・能登守護〔貞治5年(1366)10月〕、河州国主となり若江に居城、康暦元年(1379)10月2日逝去とある。義深の子基国は、嘉慶元年(1387)12月南征討使、明德3年(1392)山城守護、応永5年(1398)管領となり、居城築若江飯盛八尾竜泉等此外諸城造とある。これらのことから畠山氏が若江に城を築いたのは、南朝方を攻撃する拠点とするため、その最初の人物が義深であり、その子基国もそれを引き継いだものと考えられる。築城の時期は明確ではないが、国清が河内国守護に任ぜられたのが貞和5年(1349)〜観

応2年(1351)、延文4年(1359)～延文5年(1360)であり、義深が南征討使に任ぜられたのはこの時期と考えられ、若江城を築いたとすればこの間の可能性が高い。若江城については、昭和47年から発掘調査が開始され、現在までに堀、土塁、建物(掘立柱建物、礎石建物、埴列建物)がみつまっているが、ほとんどが落城前後のもので、築城当初のものはみつからない。今回の調査で溝、井戸といった遺構の多くが15世紀前半で揆を一にして廃絶していることから考えれば、この時期に、調査地点周辺部で築城に伴う土木工事が行なわれたのではないかと考えられる。義深、基国の両項で居城・築城とみられることから、何時期にもわたり、徐々に城としての形態を整えていったのではないかと思われる。今回の地点では15世紀前半に行なわれたと思われるが、城関連の遺構が明確ではないため今後の調査を待ちたい。もう1つの時期である16世紀後半は、廃城となった天正8年5月から12月の間のものではないかと考えられる。

弥生時代の水田畦畔は、弥生時代後期の新段階と考えられる。畦畔は南南東から北北西、東北東から西南西方向に延びているが、東西方向に延びるものもあり、不整形で画一的ではない。畦畔の基底幅20～30cm、高さ3～5cm、断面は台形、カマボコ状を呈する。推定すれば、水田一区画の面積が20～30㎡になる。今回の調査地点の西北西60m、第15次調査で畦状遺構が検出されている。この畦状遺構は上面幅0.4～1m、下面幅1.1～1.7m、高さ0.3mで東西方向に延びていた。時期は明確ではないが、弥生時代後期より以前である。時期は今回のものと若干異なると思われるが、小畦畔以外に大畦畔が存在する可能性がある。水田区画の諸類型については、すでにすぐれた論考がある¹⁹⁾。これらを参照すると佐賀県菜畑遺跡、滋賀県服部遺跡、岡山県百間川遺跡、兵庫県志知川沖田南遺跡、三重県北掘池遺跡、大阪府長原遺跡、青森県垂柳遺跡、群馬県日高遺跡、同御布呂遺跡、同芦田貝戸遺跡、島根県夫敷遺跡などにみられるように、沖積地や段丘面の緩傾斜地に立地し、大畦畔で大区画を設け、この中を小畦畔が細分している。小区画の規模と形態は地形に左右されることが多く、傾斜の急なところは小さく不整形で、傾斜の緩いところほど大きく方形に近づく傾向がある。小区画の面積は15～200㎡の間にあり、40～50㎡のものが多い¹⁹⁾。

若江遺跡で検出した畦畔も、東側に南北に延びる平滑な微高地(自然堤防)から西側に形成された背後の低平地(後背湿地)に至る緩傾斜地に立地しており、20～30㎡という小さな区画を設けたものと考えられる。

注(1) 『大阪府史』第5巻 近世編I 第2章第2節 1985年

(2) 『布施市史』第2巻 第7章第2節 1967年

(3) 井上善久男 「16世紀の瀬戸・美濃窯」 『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会 1985年

(4) 横田賢次郎・森田勉 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として——」 『九州歴史資料館研究論集』 4 1978年

(5) 上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類」 『貿易陶磁研究』 第2号 日本貿易陶磁研究会 1982年

(6) 亀井明徳 「日本出土の明代青磁碗の変遷」 『鏡山猛先生古稀記念 古文化論叢』 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会 1980年

(7) 菅原正明 「畿内における土釜の製作と流通」 『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会 1983年

(8) 間壁忠彦 「備前」 『世界陶磁全集3 日本中世』 小学館 1977年

(9) 間壁忠彦・間壁茂子 「備前焼研究ノート(1)～(3)」 『倉敷考古館研究集報』 第1、2、5号 倉敷考古館 1966～68年

(10) 藤沢一夫 「摂河泉出土古瓦の研究——編年の様式分類の一試企——」 『仏教考古学論叢』 考古学評論第三輯 東京考古学会 1941年

(11) 『縮刷版飛鳥白鳳の古瓦』 奈良国立博物館 1970年

(12) 『奈良国立文化財研究所基準資料』 IV 奈良国立文化財研究所

(13) 『藤原寺跡発掘調査報告』 『平城宮跡第1次 伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』 奈良国立文化財研究所学報第10冊 奈良国立文化財研究所 1961年

(14) 水島順伍・鈴木秀典 「長古出戸4」 『日所在遺跡緊急調査概報』 『平野遺跡群緊急調査報告書』 大阪府教育委員会 難波宮址顕彰会 1979年

(15) 藤沢一夫、谷本武、藤井直正 「河内寺跡調査概報」 大阪府教育委員会 1968年

(16) 『河内寺跡』 『河内寺跡II』 東大阪市教育委員会 1973年、1974年

(17) 八賀晋 「水田区画にみる水田耕作技術」 『日本の黎明』 京都国立博物館 1979年。

(18) 乙倉重隆 「古代水田区画論考」 『鏡山猛先生古稀記念 古文化論叢』 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会 1980年

(19) 都出比呂志 「古代水田の2つの型」 『展望 アジアの考古学——樋口隆康教授退官記念論集——』 新潮社 1983年

(20) 前掲都出氏論文B型型水田

圖 版

図版 1 若江遺跡周辺航空写真





1. 調査前の状況



2. 遺構検出状況



1. 井戸1断面



2. 井戸1全景



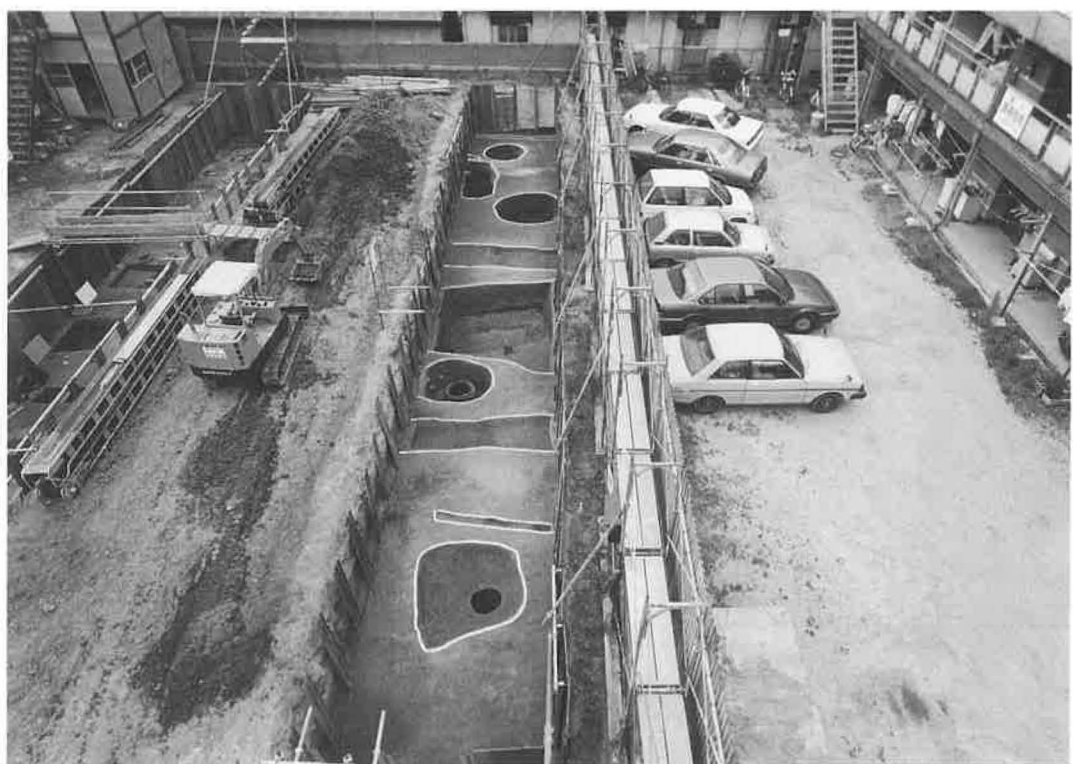
1. 井戸2 全景



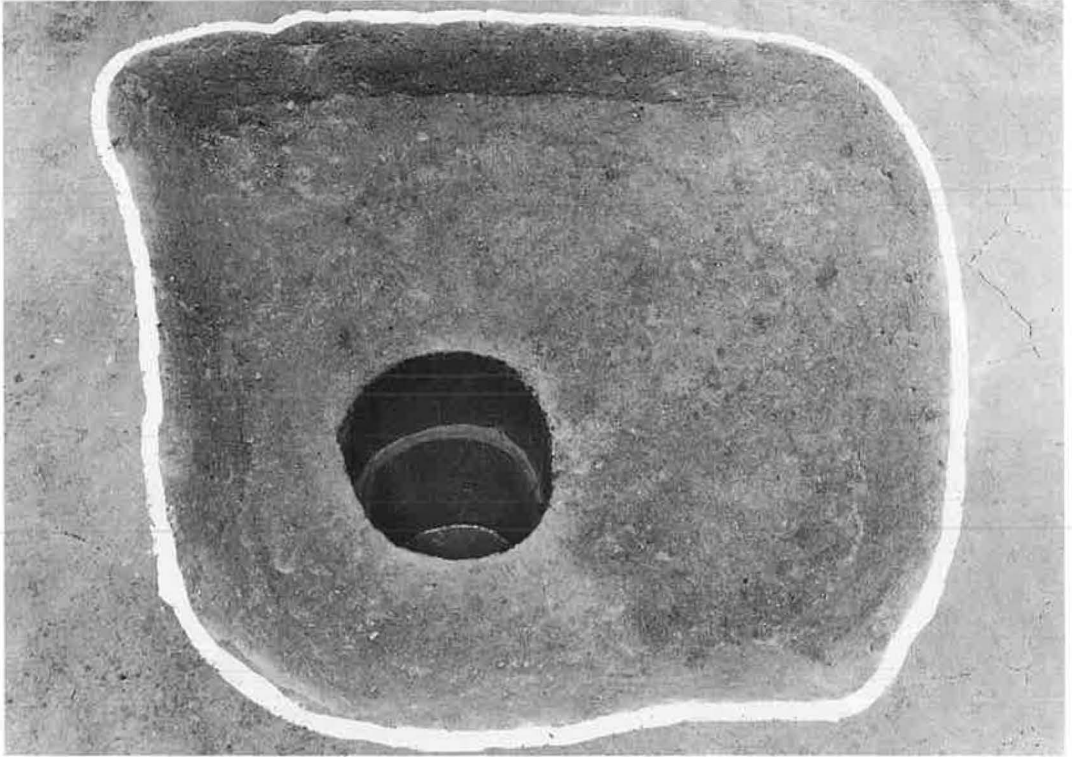
2. 井戸2 内部



1. A地区遺構全景



2. B地区遺構全景



1. 井戸3 全景



2. 井戸3 立ち割り



1. 井戸4 全景



2. 井戸4 立ち割り



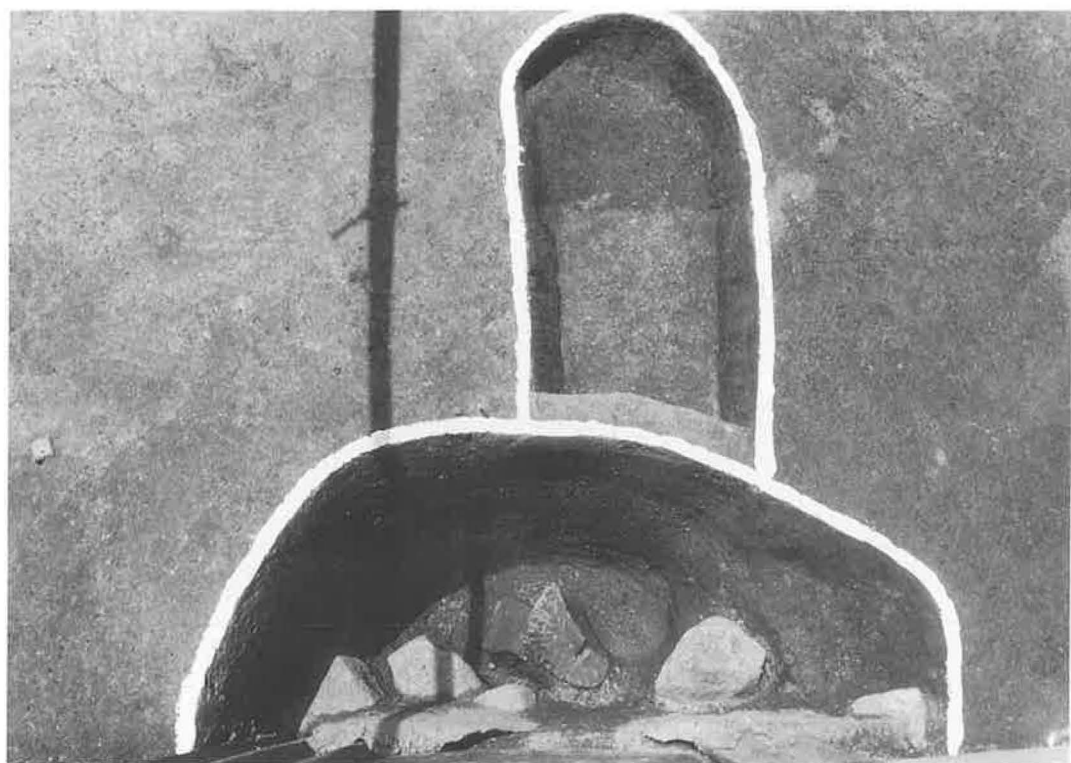
1. 井戸5タガ出土状況



2. 井戸5完掘状況



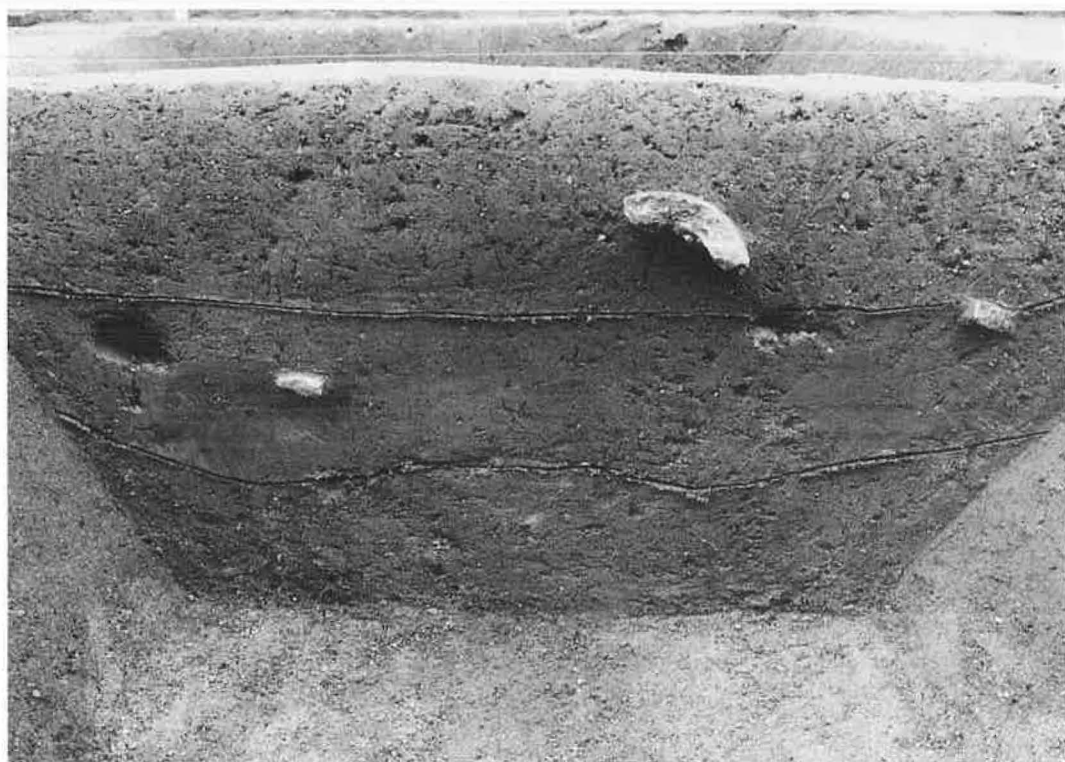
1. 井戸 6 石臼等出土状況



2. 井戸 6 全景



1. 井戸7 全景



2. 溝6 断面



1. 溝 8 羽釜出土状況



2. 溝 8 断面



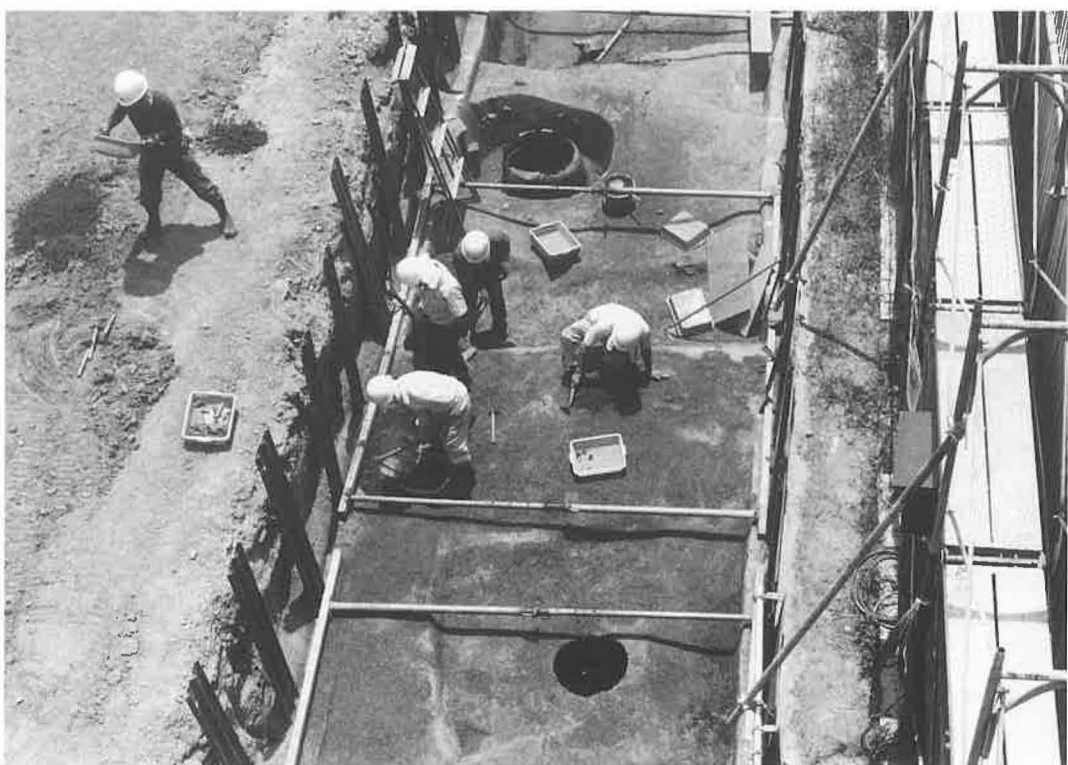
1. 溝15



2. 溝15、井戸7



1. 溝16



2. 調査風景



1. 溝17



2. 溝17鋤跡



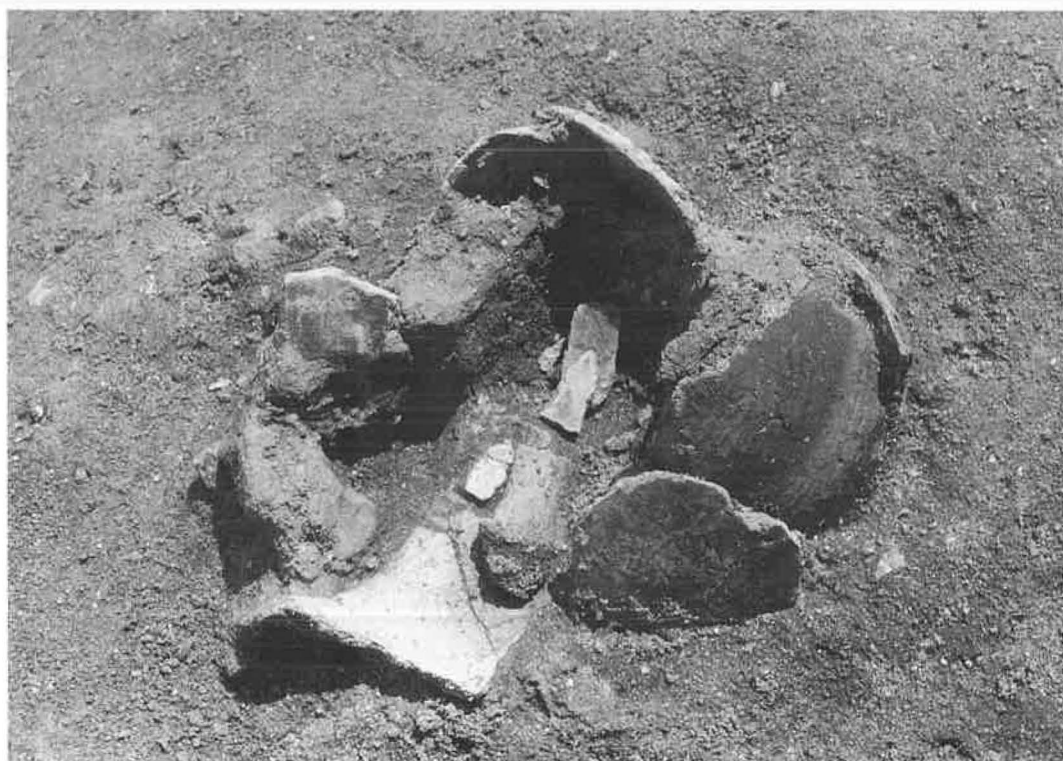
1. 第4層遺物出土状況



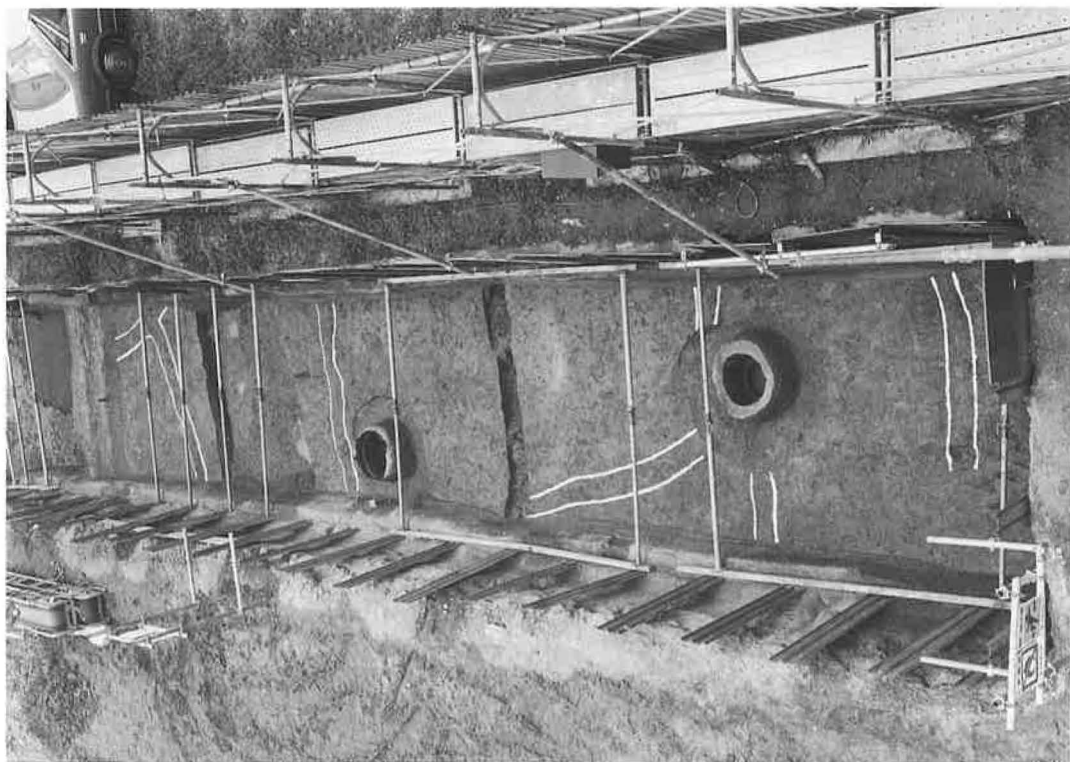
2. 第4層遺物出土状況



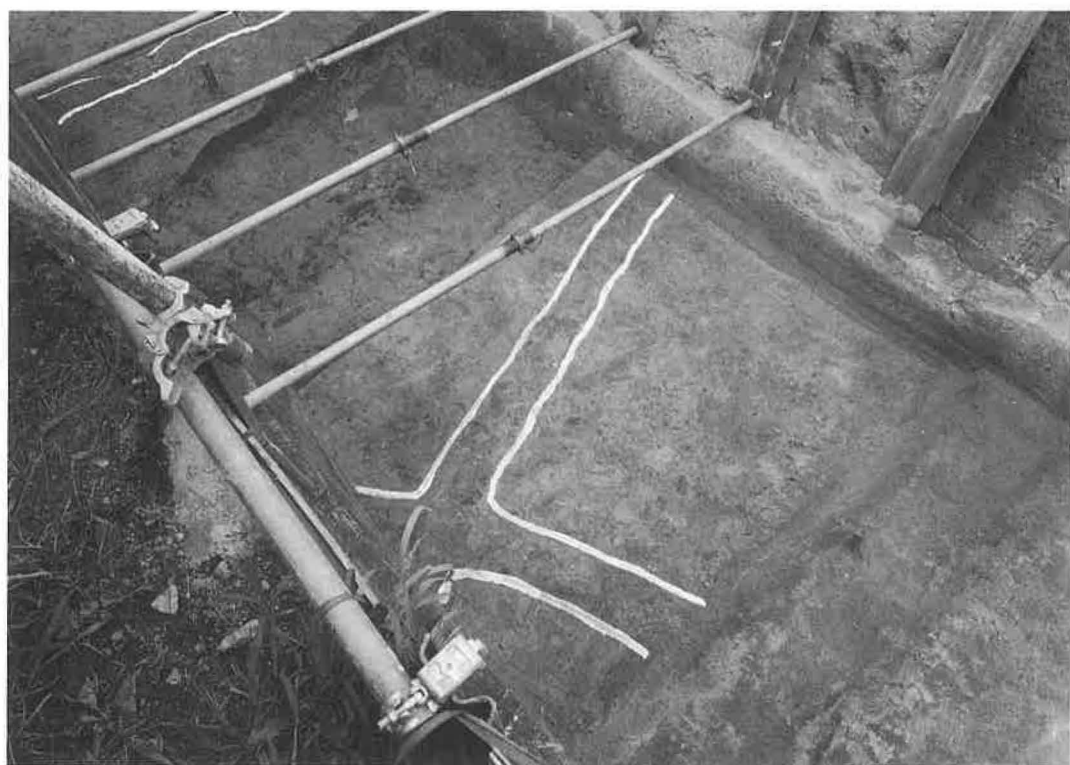
1. 第4層遺物出土状況



2. 第4層遺物出土状況



1. 第7層上面水田畦畔



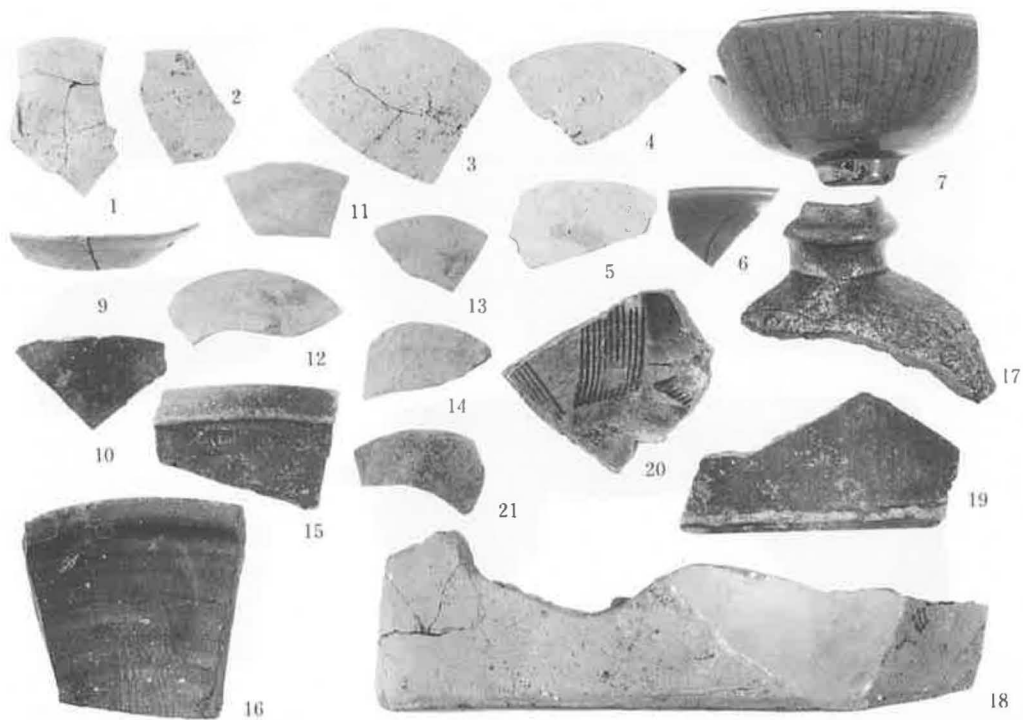
2. 第7層上面水田畦畔



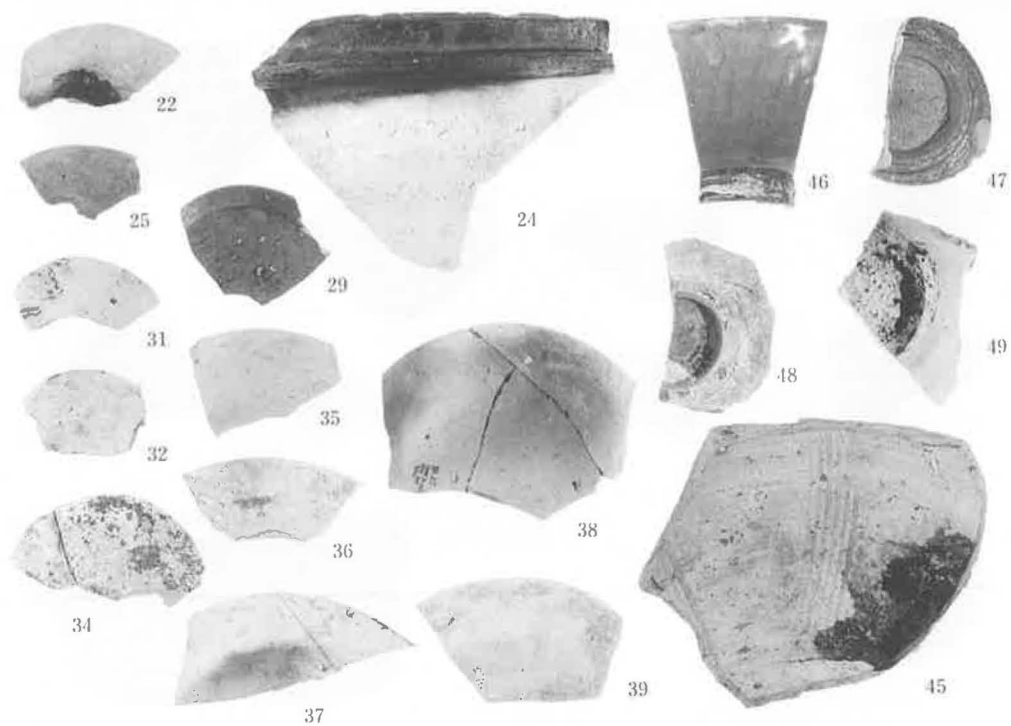
1. A1~2地区断面



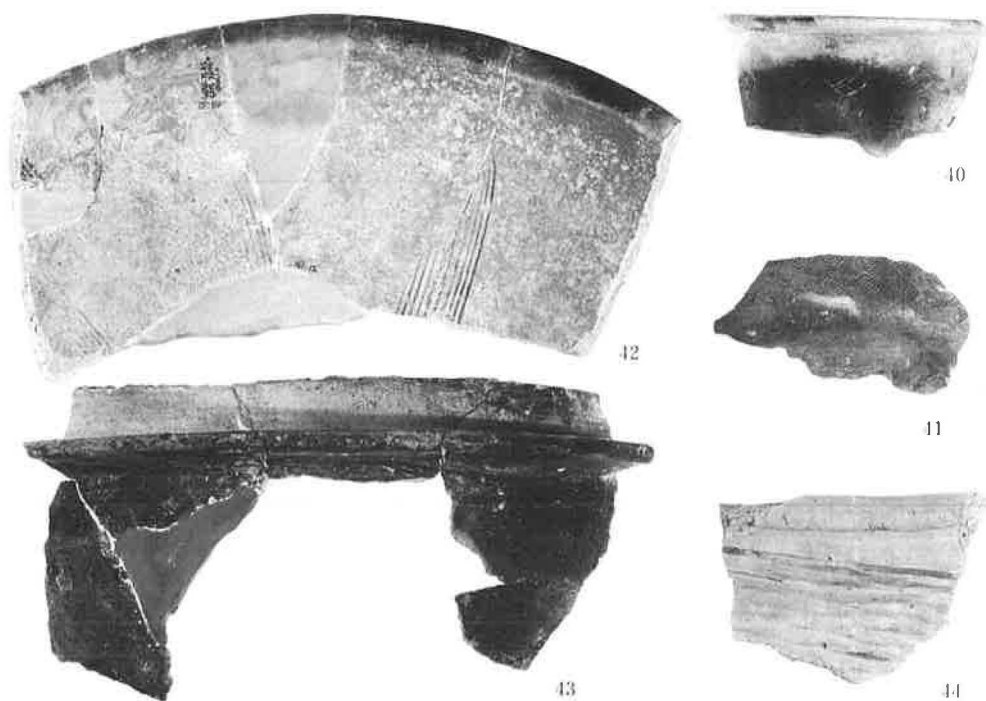
2. A2~3地区断面



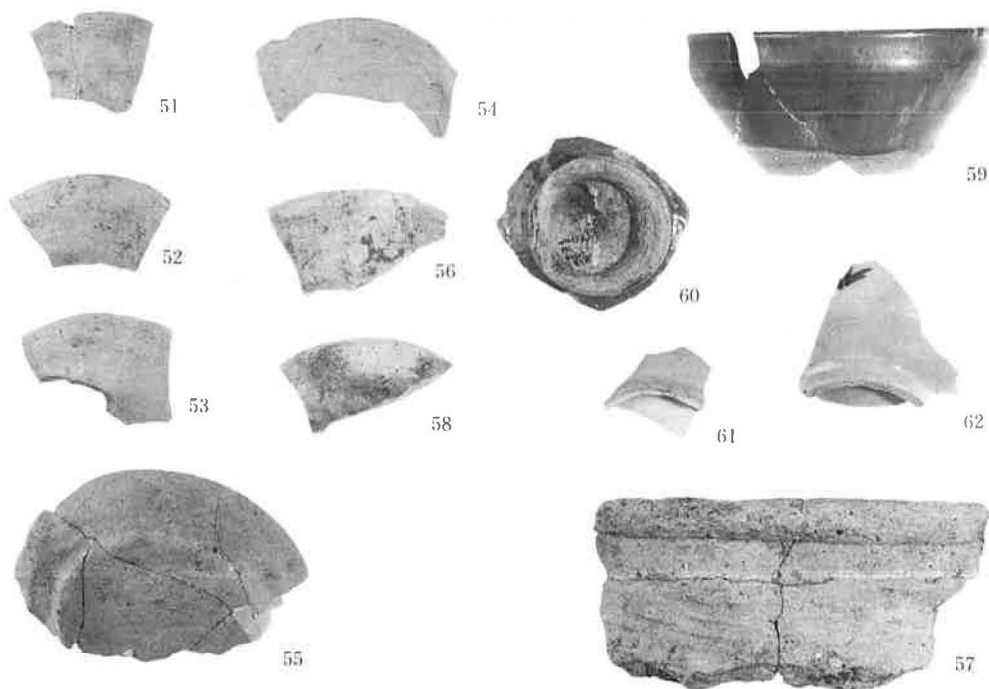
1. 井戸出土遺物



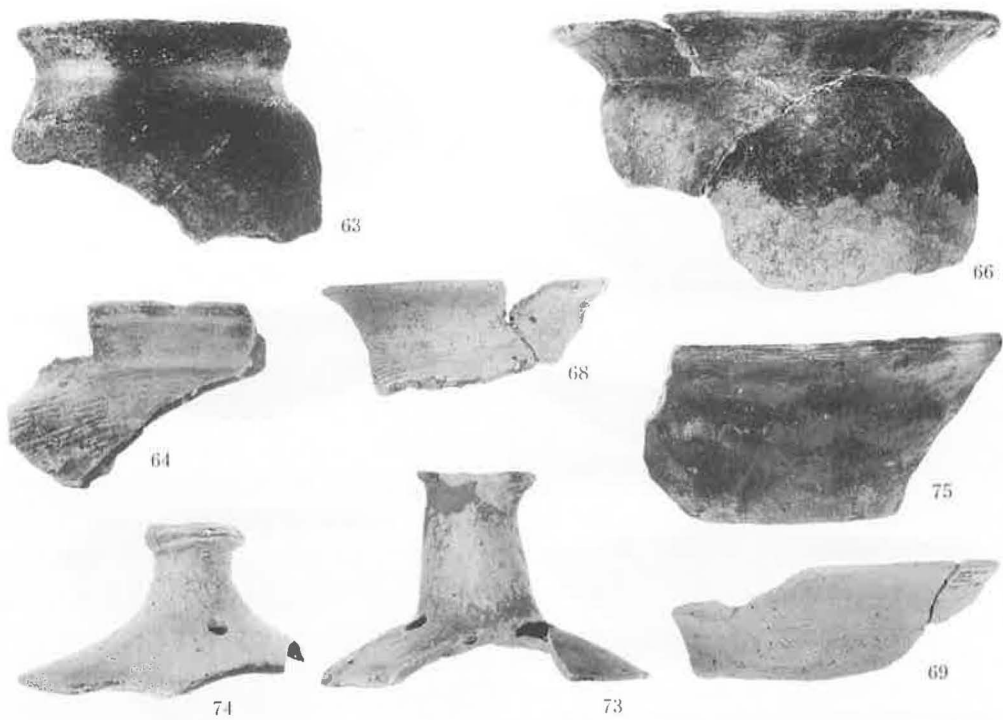
2. 溝出土遺物



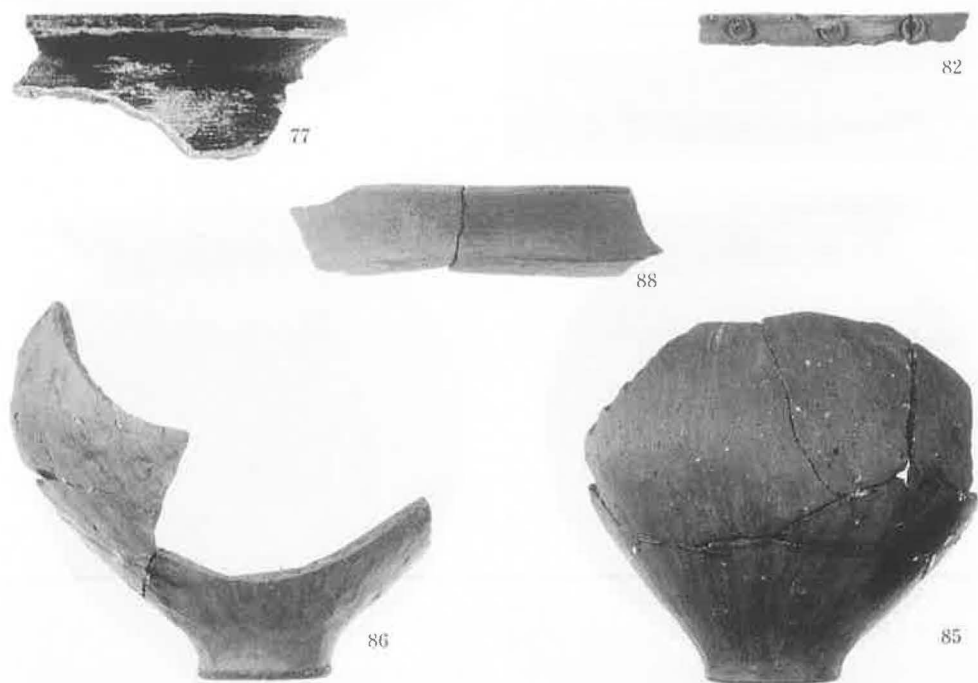
1. 溝15出土遺物



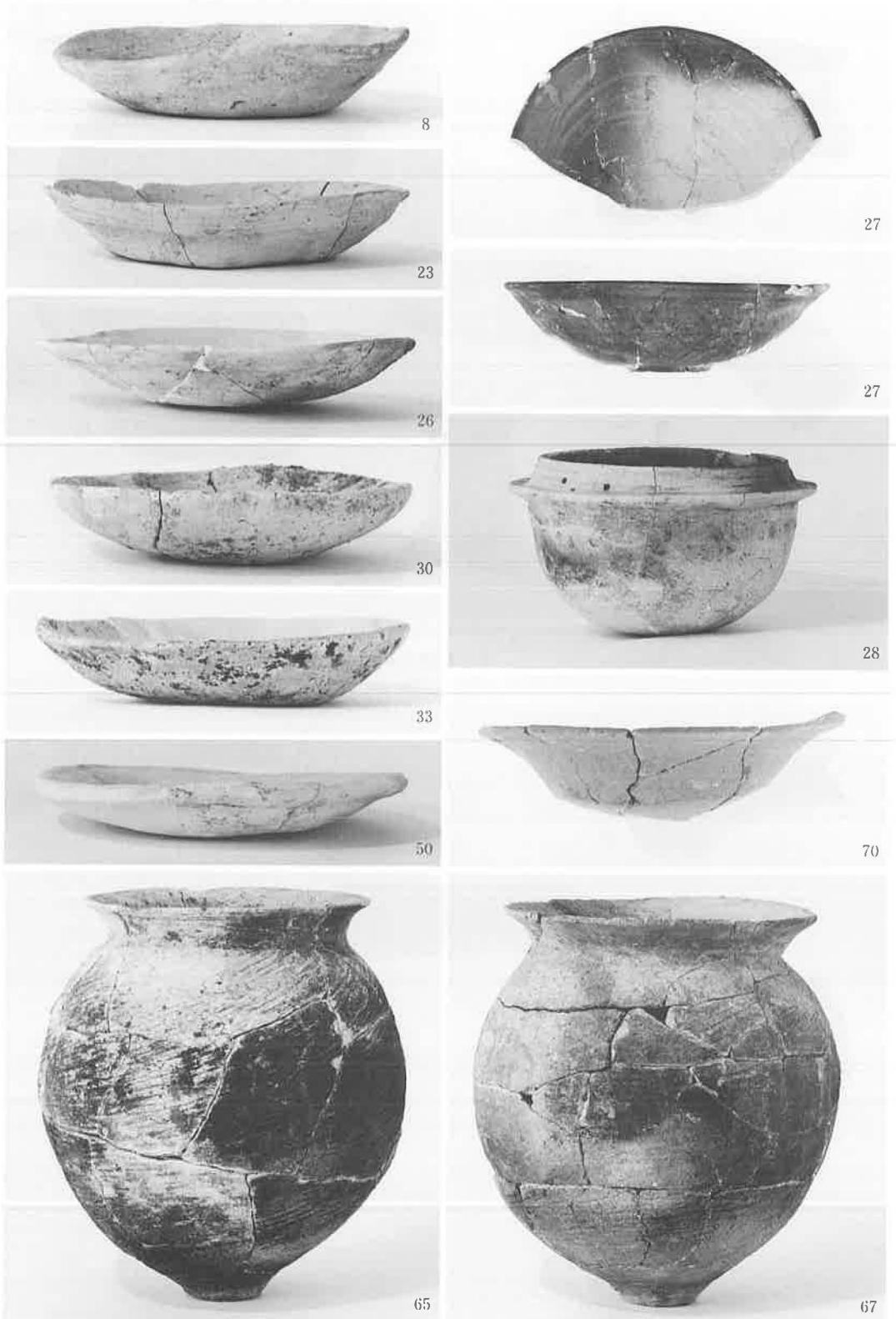
2. 第3層出土遺物



1. 第4層出土遺物



2. 第8層出土遺物



土師器、瓦器、弥生土器





89

95



90

97



93

98



102

100



103



103



101

若江遺跡第35次発掘調査報告

1988年3月31日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会

印刷 ドウミ印刷広研社